
魔法少女リリカルなのは～転生者殺しの転生者～

勦b

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 転生者殺しの転生者

【Nコード】

N4868W

【作者名】

勳b

【あらすじ】

「転生者殺しの肩書きを持つ者、鳴海湊。

彼は物語を決まった形に戻すため相棒であるアイギスを手に転生者を消してゆく。

それは、彼女のために

そんな湊が次に来た世界、『魔法少女リリカルなのは』

湊はこの世界の転生者を全て消せるのか

もしくは、物語は変わってしまうのか

はじめりは唐突に（前書き）

今回はプロローグです

私の紹介等は後書きにてー

はじまりは唐突に

1人の少年が倒れていた

そんな少年の背中を片足で踏みつけるもう1人の少年　がおり、その少年は左手に日本刀の鞘を持っており、つまらなそうに倒れている少年を見ている

「何で……こんなこと……」

「お前達のせいだ」

倒れている少年は叫ぶ

「俺は彼女達を助けただけだ！！彼女達を救いたいんだ！！」

そんな少年を冷めた目で見る少年

「彼女達は何も悪くない！！それなのに……あんな結末は不幸すぎるだろ……」

倒れている少年はまるで全て知ってるかのように言う。

それを聞くと、少年は倒れている少年を見つめる

その目は変わらず、冷めた目で――

「……彼女達を救いたいか？」

「当たり前だ!！」

少年の質問に倒れている少年は応える。

そんな少年の言葉を聞くと、少年が優しい笑みを浮かべる。

「……わかったよ、そこまで言うなら——」

「協力してくれるのか!？」

倒れている少年が驚く

そんな少年を見ながら柄を握る。

その刹那——

倒れていた少年の首から上が飛ぶ。

「彼女の運命を変えるために、消えてくれ」

少年は大量の返り血を浴びながら冷たく言う。

だが、それは徐々に灰になり、消える

少年の死体も同じように灰になっていく。

「この世界ではこいつが最後だな、アイギス」

少年は自分が持っている鞘に言う。

「そうよ、湊」

アイギスと呼ばれた鞘が少年——湊の質問に応える

すると、湊の前に切れ目が現れる

「さて、次に行くか」

湊は切れ目に向かって歩きだす。

「次の世界は『魔法少女リリカルなのは』よ」

「何時も言ってるだろ。タイトル何てどうでもいい」

興味なさそうに湊は言う

……俺は後、何人消せば変えられるんだ——

湊は俯き、目を閉じながら思い出す

湊がこうなることになった切っ掛けを——

—————

「ようこそ、湊君」

湊は目を覚ますと椅子に座っていた

……え？何で——

「慌てなくてもいいさ、今から僕が事情を説明するからね」

湊の前には、真っ白なコートを着た金髪の男がいた
後ろ髪は男にしては長く、前髪は目に掛からない位の長さで、顔
は中性的だ。

「先ず、僕の名前はタナトスよろしくね」

楽しそうに笑いながら目の前の男、タナトスは言う

「タナトス……？ギリシャ神話で死そのものを神格化した神……
だったよな」

「へー、よく知ってるね」

思い出しながら言う湊に対して驚きの表情を見せるタナトス

だが、湊は俯き、哀しそうな表示をする

「……昔、姉さんが教えてくれたんだ」

「……話が逸れたね、元に戻そう。ここは僕の館タルタロスだ」

湊は周りを見渡す

真っ白な空間であり、置いてあるものも全部白という真っ白な部
屋だ。

「さて、ここから先はどうして君が個々に招待されたかを説明し
ようか」

湊はぼんやりとタナトスを見る

「君は自殺しようとしたよね」

「何でそれを!?!」

湊は勢い良く立ち上がると初めて驚きの表情を見せる

「やっと表情を見せてくれたね。君が自殺しようとしたのを知ってるのは、君の事を見てたからだよ」

湊の表情を見れたのが嬉しいのか笑みを深くする

「見てた!? 何で!?!」

「君には素質があるからさ」

湊は落ち着きを取り戻し席に座る

「何の素質だ?」

「それは……」

タナトスは言う

何もわからない湊に対して

笑みを消し、はつきりと……

「……転生者殺し」

その目は冗談ではなく

その表情は至って真面目

タナトスは冗談ではなく真面目に湊に言ってるのだ

「……何だそれは」

対して、湊は状況が飲み込めずに戸惑いながら聞く

「転生者っていうのは、決められた物語を変えようとする人達のことだよ」

先程と同じように笑みを浮かべ、楽しそうに言うタナトス

でも……とため息混じりに言う

「決められた物語を変えられるのは困るんだ」

「困る……何でだ？」

「物語が変わるのは余り良いことでは無くてね、下手すればその物語は『無かったこと』にされてしまう」

タナトスは湊を指差す

「そこで、そんな転生者を君に消してほしいってわけだ」

「何で俺なんだ」

湊は不満そうに言う

「君は特別でね、君は『どの物語でも存在してる人間』なんだ」

驚きの表情を浮かべる湊が何か言う前にタナトスは言う

「たまに君みたいな人が居るんだ。今回はそれが君だったただけだ」

よ、深い意味はない」

「……俺じゃなく、お前がやればいいだろ」

「それは無理なんだ」

迷惑そうに言う湊に対し、困った顔をしたままタナトスは続ける

「転生者は何も考えない馬鹿な神が関わっててね、原則神と神は関わることは許されないんだ」

「俺も神であるお前が関わってるんだ、転生者とは関わってはいけないんじゃないのか？」

「直接じゃなければいいんだ」

……緩いな、神のルール

それにこいつ自分が神って言ったぞ……今更か

ため息をつく湊に対して タナトスは言う

「転生者殺しをやってくれるなら、彼女を救ってあげよう」

それを聞き、湊は勢い良く立ち上がる

その表情は真剣でどこか怒りを感じる

「物語の運命を変えてはいけないんじゃないのか？」

「彼女の死が転生者によるものだとしたらどうする」

その一言で、湊は笑みを浮かべる

「……それは、楽しそうな笑みには程遠い、邪悪な笑みで

「やるぞ、転生者殺し」

「そうこなくっちゃ」

タナトスは立ち上がると指を鳴らす

すると、1人のメイド服を着た女性が現れる

女性の瞳の色は翡翠、髪は金髪でポニーテールにしている。

「彼女の名前はアイギス。君のパートナーだ」

「アイギスです。宜しくお願いします」

アイギスは湊に頭を下げる

「俺は鳴海湊、よろしく」

アイギスに言う湊

それを聞くとアイギスは頭を上げる

「詳しいことは、アイギスに聞いてくれ」

タナトスはまた指を鳴らす

今度は切れ目のようなものが出る

「では、行きましょう。湊」

湊の手を取り扱い切れ目へと歩きだすアイギス
アイギスに合わせ、湊も歩きだす

「……待っててね、姉さん」

湊が切れ目に触れると、強烈に光が湊とアイギスを包み込み……

次の瞬間、2人の姿はタルタロスから消えた

「……」

「……姉さんを助けるために、俺は諦めるわけには……」

「ほら、早く行こ湊」

今は日本刀であるアイギスが湊に言う

「はいはい」

ため息混じりに返事をする湊

「……そういえば、アイギスの雰囲気はすぐ変わったな」

そんなどうでもいい事を考えながら、湊は切れ目へと進んでいく

「……彼女、鳴海湊の姉のために、湊は次の世界へと足を進めた」

はじめりは唐突に（後書き）

こんにちはー勦^{りく}bでーす

初めましての方は初めまして!!

普段はヤンデレ短編である病みつきシリーズをメインに書いてます

よかつたら病みつきシリーズ見てください!!（宣伝乙）

さて、今回はプロローグということで、まだなのは世界にすら行つてませんね

主人公設定とかも詳しくは書いてませんし

まあ、詳しくは次回以降!!というわけで

不定期更新になると思いますが、よろしく願いします!!

……感想くれたら嬉しいな（チラッ

）PS活動報告にて病みつきなのは（没）選ばれなかった選択肢を書きましたので其方の方も見てくれたら嬉しいです!!

……さっそく違う話になった

物語は唐突に（前書き）

連日投稿！！

今回は、説明と、軽い戦闘回です

物語は唐突に

「うあああああ！！！！」

1人の少年が叫ぶ

少年は頭が割れそうな痛みで襲われながらただ叫ぶ

——それから何分かつと、少年は急に黙り周りを見渡す

少年にはもう痛みは無い

少年が机の上にある日本刀の形をしたペンダントを手に取る

「何時までたっても、この痛みには慣れないな」

「しょうがないじゃない。コレしか無いんだから、我が儘は駄目よ、湊」

少年——鳴海湊は頭を軽く手のひらでおさえながら言う

「この痛みがなくても転生出来る転生者がうらやましい」

湊は羨ましそうに言う

湊は他の転生者とは転生する方法が違う

湊はどの物語にも存在する——

その物語の湊に今までの記憶を無理やり入れるため、彼が転生する

時は頭に激痛が走るのだ

そして、転生する前の物語にいた湊は消した転生者同様灰となり、消え、彼はその物語では『いなかった』ことになる。

この転生の良いところは、転生する前の記憶もあることだ

湊は手元にあつた手鏡を取り自分の姿を見る。

「小学生か……小学生からスタートは久しぶりだな」

「4つ前の物語以来ね」

この物語での湊は小学5年生の子供だ

背は小学生にしては高く

髪の色は黒で、前髪は左右で分けており、耳が隠れるほど長い

体は細身で色白だ

「相変わらず弱そうだね」

「黙れ」

からかうように言うアイギスに対して、興味なさそうに言う湊

湊はそのまま自分の部屋に戻った。

――――

「今日は日曜日だし、ゆっくりしましょうよ」

ベッドに腰掛ける湊に対し、アイギスは言う

「ふざけるな」

湊はジャージに着替えながら応える

「えー、初日ぐらい休ませてよ」

「お前は戦闘以外殆ど何もしないだろうが」

呆れながら湊は言うと、アイギスを手に取る

「いつ転生者が現われても良いように、今のうちに『同調』するぞ」

「わかったわよ」

嫌々アイギスが返事をする、ペンダントが光りだす――

光は、一気に部屋全体に広がると、徐々に小さくなり――

やがて、日本刀の形になる

「――同調完了よ、湊」

日本刀に姿を変えたアイギスが応える

湊は物語によって年齢が違う

大抵はその物語の主人公に近い年齢である

そのため、どの物語の湊でも使えるように、アイギスをその物語で最も使える武器に姿を合わせる

だが、それが、彼等の言う『同調』

湊は日本刀による抜刀術が得意であるため、基本的には日本刀だ

……初めは同調とか意味がわからなくて、慌ててたな

ふと過去を思い出し、軽く笑う湊

——そんな湊にアイギスは報告する

「湊、転生者が来た!!」

アイギスが言うつと同時に、湊の目の前に切れ目が出る

湊は何も言わずに切れ目の中へと歩きだす

——その表情は何もなく、当たり前のように

—————

湊がいた場所とは少し離れている山の中

1人の少年が現れる

何もなかった空間から――
唐突に――

「ここが――『リリカルなのは』の世界……」

少年は自分の頬をつねる
もちろん、痛みはある

少年はそれを確認すると、今度は力強く自分の両頬を叩く

「……いたい、てことは、夢じゃない」

少年は笑みを浮かべるとすぐに首を横にふる

――少年は転生者だ

神様のミスにより死んでしまったため、この世界に転生してきた
のだ

「喜んでる場合じゃない。俺は、彼女達を救うために――」

「救うために、何だ？」

転生者が決意を固めるように言うと、その言葉に誰かが質問する

質問をしたのは湊で――

左手に鞘を持ち、転生者に近づいてくる

「……誰だよ、お前」

「名前は秘密だ」

転生者は湊を睨みながら言い、そんな転生者をからかうように湊は言う

——無表情でありながら、冷たい目で、転生者を見ながら

「でも、肩書きは教えてやるよ」

湊は鞘を転生者に向ける

「——転生者殺しの転生者だ」

湊の明確な敵意を感じ取り、転生者は自らの武器である槍を何も無い空間から出した。

転生者は槍を構えると、一瞬で湊の背後に現れ、湊の心臓めがけて槍を突く

湊はそれを鞘で殴り、軌道をずらす

バランスが崩れた転生者の方を向き、湊は鞘で頭を横から殴る

転生者は3mほど跳ばされると、綺麗に足で着地する

「くっ……！！こいつ、強い！！」

転生者は槍を構え、湊に向かって一気に距離を詰める

「これで……！！」

転生者の魔力を込めた一撃を、湊は余裕そうにジャンプして避ける

「くそ！！こいつ！！」

槍は木に刺さり、その槍の上に湊は着地する

「――冷たい目で、はっきりと転生者を見ながら

「お前は何を救いたいんだ？」

湊は質問する

初め同様

何を救いたいかを

だが、転生者は槍を離し、湊と距離を置くこととする

湊が柄を握ると、転生者の両足が切れる

「う、あ……ああああああ！！！！」

激痛のためか、転生者は叫びだす

そんな転生者を見下しながら湊は続ける

「お前に何かを救われるのは困るんだ」

湊は言つと、切り落とされた足を見る

足は徐々に灰になり消えていく

「俺が転生者を切り付けると、その部分は灰になるんだ」

湊は続ける

転生者の叫びを聞きながら

「灰になり、消えたらそれで終わり。その転生者がしてきた事は『修正』され『無かったことになる』」

でも――と湊は続ける　冷たい目で、転生者を見下しながら

「修正にも限界があつてね、『大きすぎる出来事』は修正出来ないんだ」

だからこそ――

「だからこそ、俺は、お前達転生者が『何かしでかす前に、消す必要がある』」

――柄を軽く握る

「それが、『転生者殺し』だ!!」

柄を握っている右手が一瞬動く

――その刹那

転生者の首が切れる

転生者はそのまま灰になりいずれは消えていくだろう

それは槍も同様で、湊はそのまま地面に着地する

「あつという間だったね」

「弱かったな」

湊は興味なさそうに言うと、歩きだす

「何時もどつり初めに消す転生者には優しく説明したね」

アイギスは楽しそうに言う

「俺がこの物語に転生した理由を教えただけだ」

湊は何時もどつりの事をしたただけだ

湊が歩みを止める

そこには、今の湊が住んでる町が見える

「さあ、転生者殺しの始まりだ!!」

湊は邪悪な笑みを浮かべながら

「―――1人、高々に宣言した

この物語を『救う者』の物語が始まった

物語は唐突に（後書き）

こんにちはー勦bでーす

プロローグが以外と人気だったんで、調子に乗って連日投稿ですw

w
w

今回は戦闘と説明回でしたね

湊の強さの理由も徐々に明らかに!!

……出来たらいいな

というわけで、今回はこの辺りで

また次回の投稿で会いましょう!!

P S 次回予告を次回やってやんよ!!

……だじゃれじゃないよ

転生者は唐突に（前書き）

今回は日常？パート！！

さっそくグダグダです

転生者は唐突に

転生者を消した次の日の朝

湊は指定された制服に着替えている

「湊、朝ごはん何？」

そんな湊の部屋に1人の女性が入ってくる

「たまには自分で作ったらどうだ、アイギス」

湊はアイギスに構わず着替えを続ける

「お腹がすいたから作りたくない」

「お腹がすいたから作るんだろ」

馬鹿を言うアイギスに呆れながら湊は着替えを終える

「朝食はテーブルの上に置いといたから勝手に食べといてください
アイギスさん」

爽やかな笑みを浮かべると湊はアイギスに言う

アイギスはそんな湊を見て笑いだす

「ハハハハ、相変わらず似合ってない」

「黙れ」

湊は笑みを止め、何時も道理の無表情に戻る

湊はアイギスを見る

背は湊より頭1つ分高く今は金色の髪を結んでない
服装はピンク色のパジャマだ

……相変わらず子供っぽい趣味だ

アイギスは様々な姿になれるが、本当の姿は今の人型である

……神、タナトスに仕えるメイド

それが、アイギスだ

「じゃあ、私は朝ごはん食べてくるね」

そう言って部屋を出てくアイギス

この物語での湊とアイギスの関係は従姉だ

湊の親が亡くなったためアイギスに引き取られた

それだけだ

湊は殆どの物語で家族がない設定になっている

……まあ、転生者になる前の俺も似たようなものだけど

湊は机の上に置いてある眼鏡を取り、それを掛ける

アイギスと『同調』したため、今の湊は殆どの能力が人より若干高い

その能力には視力もあり、今は眼鏡を掛けなくても充分なんだが怪しまれないためにも掛けておくのだ

湊は部屋を出るとテレビを見てるアイギスに声をかけられる

……相変わらず食べるのは早いな

「いつてらっしやい湊」

「……行ってきますアイギスさん」

爽やかな笑みを浮かべ返事をする湊

今度はアイギスも笑わず、そのままテレビを見る

湊は家を出て歩きだす

――昨日とは違い、楽しそうに笑いながら

――

湊が通う小学校

私立聖杯大学付属小学校はそれなりの学費とそれなりの学力が要

求される学校だ

湊は小学5年生の成績ではトップであり、生徒会長を勤めるなどしており、それなりの注目を浴びている

……これじゃ、昼は転生者殺しもお休みだな

余り騒ぎを大きくしたら面倒なことになるのだ、湊としてはそれは楽しくはない

「ふえー!!」

湊が教室に向かっていると聞き覚えがある声があった。湊は気になったため、声があった方へと行ってみる

といっても、声があった場所は目と鼻の先と例えてもいいような距離であり……

そこには女の子が倒れていた

湊は一瞬驚くと、倒れてる女の子に近づくと

「……大丈夫？」

「ふえ？……あつ湊さん!!」

彼女……高町なのはは湊を見て驚く

「おはよう、なのはちゃん、また転んだの？」

「うう……はい」

彼女は立ち上がると恥ずかしそうに返事をする

「怪我は無い？」

「はい、大丈夫です」

なのはは元気に笑いながら応える

すると、なのはの後ろから声がする

「相変わらずなのはは運動音痴だな」

からかうように笑いながら少年は言う

「そういうのは、本人に直接言ったら可愛そうだろ、上條君」

湊は少年――上條に軽く注意する

本人は気付いてないがなのはは湊の一言で、更に落ち込む

「それじゃ、お友達も来たみたいだし俺は行くよ」

湊は爽やかな笑みを浮かべ、この場を去った

その後の学校生活は特に問題なく終わり、既に放課後になった

今日は生徒会の仕事も無いため早めに帰ろうとする湊

だが、彼は校門を出たところで足を止める

(まだ帰っちゃだめよ、湊)
声がするー聞こえたというよりも、脳に直接語り掛けてると
いったようなーそんな声

(どうしてだ、アイギス)

湊はアイギスに理由を訪ねる

今、湊とアイギスが使ってるのは念話というものである

湊はアイギス限定だが念話を使えることができる、便利な力だ

(今から向かって欲しい所があるの)

朝のようなおふざけは無く、その声はどこか真剣味を感じる

(わかった。案内してくれ)

湊は歩きだす

こつこつ時のアイギスはいつらが一枚噛んでる

ー湊の敵である、転生者が……

――

上條を含め6人の子供が一匹の倒れているフェレットを見つめる
「動物病院に行こう、そうすれば何とかなるだろうしな」

上條の隣に立つ男の子が倒れているフェレットを軽く撫でながら
言う

「そんなの言われなくてもわかってるわよ。馬鹿九条」

そんな少年――九条に言うアリサ

「馬鹿だと!!」

「何よ、馬鹿じゃない!!」

睨み合う2人を宥めるようにすすかは言う

「まあまあ、落ち着いてよ、アリサちゃん。高木君も九条君を」

「わかった、お前も落ち着け九条」

高木と言われた少年は九条の肩に手をのせ顔を近付ける

「デバイスの調子はどうだ？」

「何時でも行けるぜ」

小声で2人は話し合う

そんな4人ね中心にはなのはと上條がおり、上條が後ろを向く

「まずは、動物病院に行く前に……そろそろ出てきたらどうだ！」

上條が向いた先に言う

全員の視線が集まると、1人の少年が出てくる

「「「湊さん!!?」「」「」

高木と上條以外の人意外な人物の登場に驚きの声を上げる

湊は困った顔をしながら近付く

「ここは通学路じゃ無いんだけど……」

「湊さん、実は……」

なのはは湊にフェレットを見せる

「フェレット……かな?元氣無いね」

「此処で倒れてたのを俺達が見つけたんです」

上條は湊に言う

朝とは違い疑いの眼差しを向けながら

「そっか……」

……フェレットがこんなところで倒れてた?

……聞いてみるか

（アイギス、動物病院に行かせていいのか？）

（大丈夫よ。行かせて）

アイギスからの返事がくると、湊はなのは達に言う

「動物病院まで案内するよ」

「結構です、俺達だけで充分なんで」

湊の好意を高木は彼を睨みながらしつかりと断る。

「……そっか、ならいいけど。ちゃんと動物病院に行くんだよ、ケガとかしてたら治さなくちゃ」

湊は少し悲しそうな表情をすると、アリサが慌てだす

「高木！！あんた先輩に何言ってる！！」

「いいんだよ、アリサちゃん。俺が余計な事を言っただけなんだから」

湊は笑みを浮かべ、踵を返し歩いてく

——その表情は邪悪な笑みで——

――

「おかえり、湊」

湊が家に帰ると、出てった時と全く変わらない格好で彼を迎えるアイギスがいた。

「ただいま、アイギス」

湊はテレビの電源を消し、椅子に座る

「ああ！今いいところだったのに！！」

「話があるから座れ」

テレビの前にあるソファアールから立ち上がり大声で文句を言うアイギスに呆れながらも湊は言う

アイギスはしぶしぶ、湊の前の椅子に座る

「転生者を見つけた。3〜5人だ」

「あら、早いわね」

アイギスはたいして驚かずに言う

「お前の方はどうだ？」

「0よ。誰も力を使つてなかつた」

アイギスは転生者の力を読み取り、そこから場所を判定することができる

そのため、意味もなく能力を使う転生者は直ぐに消すことができる。

「そうか……」

湊は残念そうに伝える

「何で転生者を消さなかつたの？」

アイギスは湊の目を真つ直ぐ見つめる

「――無表情にただ、真つ直ぐ」

「まだ正確にはわからないからな。それに――」

「――湊は楽しそうに笑いながら伝える

「相手の力と存在意義を全否定してから消した方が、楽しいだろ」

歪んだ笑みを浮かべ

ただ、楽しそうに

湊は言う

「まあ、何かしそうなら直ぐに消すさ」

湊は立ち上がり自分の部屋に向かった

取り残されたアイギスは湊の部屋を見ながら心配そうに言う

「それが、あなたの『姉を殺した転生者』に対する『罰』のつもりなのかしら」

アイギスは独り言のように小さく言う

誰に対して出もなく、ただ――

転生者は唐突に（後書き）

こんにちはーおどろきです

今回はフェレット登場まで書きました！！

……疲れた

今回でた上條、九条、高木とは何だ！？

オリキャラか？それとも転生者？

……どうなるんだろ

まあ、様々な謎（？）は次回説き明かされる（？）……かも

というわけで、次回予告！！

今回はコードギアス風に主人公、鳴海湊に任せます！

わかってるさ

あいつら転生者が何をやるかなんて、簡単に予想できる

ああ、問題ない

……全ては姉さんの為！！

PS 次回の投稿時間かかるかも……
詳しいことは活躍報告にて！！

感想くれたりしたら嬉しいな)チラッ

運命は唐突に（前書き）

総合評価100達成！！

お気に入り登録20達成！！

PV6000達成しました！！

いろいろと急すぎだろ

今回からヤンデレ要素が入ります

運命は唐突に

湊がフェレットを見つけたのは達に合った日の夜

湊は眠そうにベッドに腰掛けていた

「……………うん、衣装の同調終わったよ」

そんな湊の前に立つアイギスは唐突に言う

「あの衣装は嫌いなんだけど」

「我儘言わない」

湊が嫌そうに言うと、アイギスが湊に手を差し延べる

「『物語』がもうすぐ始まるわ」

アイギスの手を取り、湊はゆっくりと立ち上がる

「物語を変えさせないために　行くぞ、アイギス」

そう言うと、湊の前に切れ目ができ、湊はアイギスと共に切れ目の中へと進んでく

無表情に冷たい目をしながら

ゆっくりと

そんな湊とほぼ同時刻、1人の転生者　　上條は夜の街をゆっ
くりと歩く

上條は、静かに自分の携帯電話に付いてる星の形をしたストラッ
プを見ながら呟く

「……やっと物語が始まったな」

そんな上條の呟きに返事が帰ってくる

「俺はもう少し平和に暮らしたかったな」

「そんなの何時だって出来るだろ」

上條の呟きに応えたのは九条で、それに返事したのは高木だ

この3人は転生者だ

転生前も友人であり、3人仲良く神のミスで死んだ

そして、神にお願いしてこの物語に転生したのだ

「俺達はこの『物語に転生した理由』　　忘れてないだろうな
？」

「理由？何なんだ、それ」

上條の言葉に応える

「誰だ!!!?」

九条が声をした方向に向かって叫ぶ

すると、上條達の目の前に切れ目ができそこから、真っ白なコー
トに左手で鞘を持っている 湊が歩いてくる

湊の顔はフードを深く被っているため上條達からは見えない

「『転生者殺し』だ」

静かに湊は言う

冷たい目で転生者達を見ながら
無表情にただ

切れ目から出ると、何もなかったかのように切れ目が消える

「なあ、教えてくれよ転生者」

機械で変換したような声で、静かに湊は尋ねる

「お前は何故それを知っているんだそれに、転生者殺して何だ
!?!」

湊を睨みながら高木は言う

「さあ、何でたる」

からかうように返事をする湊に九条は携帯電話を取り出す

「落ち着け九条!!」

九条は上條の言葉を無視して、剣の形をしたストラップに触れる

「お前等は先に行け、こいつを倒したら俺も行く」
九条が静かに言うと、高木は首を縦に振ると

「行くぞ上條、なのはが居る場所はもうすぐだ」

高木は上條の肩に手をおく

その刹那

上條の足元に白い線が走る

「……っ!!高木!!」

上條はすぐ傍にいた高木を押し飛ばし、自分は後ろに飛ぶ
すると、上條が居た場所は切り刻まれる

「行けると思うなよ、転生者」

何時の間にか掴んでいた柄を離す湊

「くそ!!邪魔だ!!」

九条のストラップが光ると、形が大剣に変わる

「やるぞ、リベリオン!!」

九条はリベリオンを構えると、湊との距離を一気に詰める

「ステインガー!!」

そう言うと、手にしているリベリオンで高速に突きを繰り出す

湊はその突きを鞘で防ぐ

「どうした、この程度か？」

「くっ!! 舐めるな!!!!」

九条はそのまま連続で突きを繰り出す、湊は全て鞘で防ぐ

(退け、九条!!!)

九条は高木からの念話を聞くと右に大きく飛ぼうとするが

「遅いな」

湊は九条が飛ぶ前に鞘を頭目にかけて振り下ろす

「なっ」

九条が地面に頭から倒れると、湊はそんな九条の頭を踏みつける

「早速1人終わりだな」

「させるか!!」

上條が湊に言うと、高木の横に立ち、左手に持つ片手銃を湊に向ける

「殺させはしない!!」

高木も自らのデバイスであろう片手銃を右手に持ち、湊に向ける

「撃ち抜け、エボニー!」

言つと同時に高木はエボニーを湊に撃つ

片手銃とは思えない連射力で、まるでマシンガンのような速度で魔力弾を撃ち続け

「やるぞ、

アイボリー!!」

上條は左手に持った片手銃 アイボリーで湊を撃つ

此方は、片手銃とは思えない威力であろう魔力弾をだ

「…………アイギス」

(わかってるわよ、湊)

湊が刀を抜く

「 つ!!高木!!」

上條が高木の腹を目掛けて蹴とばす

すると、湊に向かって撃たれていた魔力弾全てに白い線が走り

「遠刀刹那」

湊が呟きながらアイギスを収めると全ての魔力弾が切り刻まれる

さらには、アイボリーを持っていた上條の手も切れる

「っ!!!?!」

「上條!!!」

上條の右手は地面に落ちる前に灰になり、消えていく

そんな上條を見ながら湊は薄く笑う

「さあ、次はお前だな」

踏み付けている九条を見ながら言う

冷たい目で

淡々とした口振りで

「させるか!!!」

そんな湊に対して、上條は左手でアイボリーを持ち、湊に近付き

ながら撃つ

「邪魔するな」

冷たく言つと、湊はアイギス柄を掴む

「消えてろ」

その刹那

魔力弾は切り刻まれると、そのまま消滅する

「2人共、逃げろ!!」

上條が叫ぶと、湊との距離を一気に詰めるとアイボリーで湊に殴り架かる

湊は少し驚きの表情を見せると、後ろに軽く飛ぶ

湊が退いたことにより、九条は立ち上がり、リベリオンを構える

が、それは高木に止められる

「九条!!ここは撤退だ!!」

「だが、あいつは!!」

「今の俺達じゃ無理だ!!」

「くっ!!」

九条は悔しそうに湊を睨むと、高木の横に下がる

「上條、お前も早く!!」

高木が上條に言う

それと同時に

上條の体が真っ二つに切れる

「上條!!!!!!」

2人は叫ぶ

真っ赤な返り血を浴びた転生者殺しを見ながら
徐々に灰になっていく上條を見ながら

「あいつ!!!!!!」

「逃げるぞ!!!!、高木!!!!」

リベリオンを構えようとする九条に高木は叫ぶ

「何でだ!!あいつは上條を!!!!」

「上條の犠牲を無駄にするな!!!!」

そう言つと、高木は九条の肩を掴む

すると、2人を中心とする魔方陣ができ

その瞬間、2人の姿が消えた

「追い掛けなくていいの？」

黙っている湊に対してアイギスは言う

「上條はあの時確かに切った」

上條が近づいてきた時、魔力弾と共に湊は上條を切っていた

「だが、それでもあいつは九条と高木を逃がすために殴り架かってきた」

「そうね、流石のあなたも驚いてたわね」

アイギスがそういうと同時に光だしペンダントに戻る

湊の姿も私服姿に戻る

「そんな上條に免じて、特別に逃がしてやるぞ」

湊は軽く笑いながら言う

「本心は？」

「あの時一緒に殺されておけば良かったって思わさせてやる」

「……最低な性格ね」

呆れたように言うアイギスを無視して湊は帰ろうとするが

「ふえ、湊さん？」

そんな湊を彼女　　高町なのはが止める

「……………なのはちゃん」

湊は学校の時のような、薄ら笑いを浮かべる

「良かった、やっと見つけたよ、ちょっと前に偶然なのはちゃんを見かけて、時間も時間だし心配してね、探してたんだ」

湊はなのはに近付きながら言う

「私を探してくれてた……………」

なのはは湊の言葉を聞くと嬉しそうな笑みを浮かべる

「ありがとう　　湊お兄ちゃん」

なのはの一言で湊が止まる

湊『お兄ちゃん』

なのはは湊を呼ぶときは何時も湊『さん』だ

……………何で急に

「……………あの」

湊が考え込んでるとなのはに話し掛けられる

「どうかした、なのはちゃん」

「……やっぱり、2人しかいない時だけでも昔みたいにお兄ちゃんって呼んだら迷惑ですか……？」

湊の態度になにか思ったのか、なのはは不安そうに言う

昔みたいに……？

昔何かあったのか？

湊は思い出しながら、なのはに言う

「別にいいよ、なのはちゃんさえよければ」

それを聞いてなのははまた嬉しそうに笑みを浮かべる

なのはは湊の横に立つ

「帰ろうよ、湊お兄ちゃん」

「そうだね」

なのはの一言に笑みを浮かべて湊は応える

「もう遅いし、なのはちゃん家まで一緒に行こっか」

湊はなのはに手を差し延べる

「でも、湊お兄ちゃんに迷惑かけるから……」

なのはは俯きながら言う

「構わないよ、それぐらい」

湊はなのはの手を取る

「ふえ！？湊お兄ちゃん!？」

湊はそのまま歩きだす

なのはは始めはおどおどしてたが、少し歩くとそれも無くなり、湊と共に歩いていく

何時も私を見ていてくれる

なのはは湊の横顔を見る

何時も私の傍に居てくれる

湊は難しい顔をしながら歩いている

何時も私のことを考えていてくれる

私も何時も考えているよ

湊お兄ちゃん

運命は唐突に（後書き）

こんにちはー戮bでーす

とりあえず先ずは

総合評価100達成！！

お気に入り登録20達成！！

PV6000達成しました！！

……まだ3話しか投稿してなかったのに

意外と好評価で嬉しいです！！

さて、今回の戦闘もやはり主人公圧勝でしたね

……そろそろ、主人公の秘密とか書きたいですね

まあ、先ずは好評価記念を祝して、番外編でもやりたいですね

その前に湊とアイギスのキャラ紹介も書きたいなー

PS今回出てきた転生者の武器は全て『デビルメイクライ』に登
場する武器です

過去話は唐突に（前書き）

PV13000達成！！

総合評価170達成！！

お気に入り登録40達成！！

記念番外編については後書きで！！

過去話は唐突に

なのはは、一緒に歩いている湊の横顔を見る

私を知ってる誰よりも優しいお兄ちゃん

私のことを誰よりも見てくれているお兄ちゃん

私のことを何時も考えてくれるお兄ちゃん

私が寂しい時は何時も傍に居てくれるお兄ちゃん

なのははふとそんな湊との出会いを思い出す

湊との始まりを

意味もなく唐突に

なのははいい子でないと駄目だった

いい子でないと誰も見てくれないと本気でそう信じていたのだ

そんななのは今、家から少し離れた公園のベンチに座っている

家に居ても寂しいから、外で時間を潰そうと考えたのだ

そんななのは1人の少年が声を掛ける

「どうかした？」

なのはは突然声を掛けられて驚きながらも少年を見る

なのはも知ってる小学校の制服を着ており、心配そうになのはの
ことを見ている

「隣いい？」

なのはは少年に聞かれると反射的に首を縦に振る

「ありがとう」

少年はなのはの隣に座る

「迷子にでもなったの？」

少年がなのはを見ながら聞く

「ううん、迷子じゃないの」

なのはは俯きながら応える

「……どうして私に話し掛けてくるんだろ

「友達でも待つてるの？」

少年は変わらずなのはを見ながら聞く

「……うつん」

なのはも変わらず俯きながら応える

「――私のことを心配してくれる友達なんていない

「じゃあ、家族？」

少年はなのはを見ながら聞く

「……そう」

なのはは俯きながら嘘をつく

「――私を見てくれる人なんていない

「――私のことを心配してくれる人もいない

「――でも

「――ここにいたら、探しに来てくれるかもしれない

「――ここにいたら、見てくれるかもしれない

「――『いい子』じゃない私のことでも

「……俺も家族を待つてるんだ」

少年の言葉を聞くとなのはは少年を見る

「一緒に待とうか」

優しく微笑みながら少年は言う

「……なのはを見ながら」

「……なのはに優しく言う」

「うん」

なのはは短く少年に言うと視線を少年から地面に戻す

「……」

あれから何時間経っても2人の親は来ない

「遅いね、君の親」

少年が口を開く

なのはは俯きながら応える

「……うん」

「……来てくれない」

「……私が何時まで待っても来てくれない」

「……だって、私はいい子じゃないから」

「……私は」

「っ!?!?どうしたの、急に!?!?」

少年が慌てる

「ふえ……何が?」

なのは首を傾げながら少年に聞く

少年はポケットからハンカチを取り出すとなのはの頬に当てる

「……何で急に泣くんだよ」

少年は困った顔をしながらなのはの涙を拭いていく

なのはは少年に言われてやっと自分が泣き出したことに気付く

「動くな、上手く拭けないだろ」

なのはが顔を逸らそうとするのを少年が止める

なのはは少年の言うとおりに動きを止める

「……なのはは少年を見る」

――一生懸命なのは涙を拭いていく少年を

――何も知らないなのはのことを考えてくれている少年を

――なのはは見る

――私のことを見てくれる

――私のことを心配してくれている

――私の傍に居てくれる

なのははそう考えると、更に泣き出す

「ちょー！何で更に泣き出すんだよー！」

少年は困った顔をしながらもなのはの涙を拭いていく

――

「それでも飲んで落ち着け」

少年は泣き止んだのはに自販機で買ってきたココアを渡す

「……ありがとう」

なのはは口調が変わった少年を見ながらそれを受け取る

「それ飲んだら帰るぞ、どうせ家族を待ってるなんて嘘なんだろ」

「ふえ!?!」

少年の言葉になのはは驚く

「……家族を待ってるのを嘘って何でわかったの!?!」

「はじめから嘘ってわかってた」

なのはが少年に聞く前に応える

「……私のことをわかってくれてる」

なのははそう思うと、嬉しそうに笑う

少年はそんななのはを気味悪そうに見ると、立ち上がる

「……ほら」

ココアを飲みおわったなのはに手を差し伸べる

なのははおどおどしながらも、その手をしっかりと掴む

「家までの道はわかるんだろ?」

「うん!」

なのはは少年を引っ張るように歩きだす

嬉しそうに話すなのはに相槌をうちながら少年は歩きだす

――2人仲良く歩きだす

――

「そう言えば――」

なのはが唐突に口を開く

「あなたは親を待たなくていいの?」

なのはの言葉を聞くと、少年は軽く俯きながら応える

「……いないんだ、家族」

少年は続ける

「昔、事故で無くした」

少年は悲しそうに

「今は、親戚の家に預かってもらってる」

少年は口を閉じる

「……」めんなさい

なのはが謝ると少年は慌てて言う

「べつに誤らなくてもいい」

少年が言つとなのはは止まる

「家はどこ？」

少年はなのはに合わせて止まる

「……うん」

なのはは申し訳なさそうな表情をしたまま少年の手を離さない

少年は困った顔を見ると、なのはが口を開く

「……名前」

少年の顔を見ながら言う

「私は高町なのは」

なのはは少年に自己紹介をする

少年はそんななのはを見て軽く驚くと、直ぐに笑顔になる

「鳴海湊、よろしくなのはちゃん」

なのははそれを聞くと、湊に不安そうに言う

「…………湊お兄ちゃんって呼んでもいいですか？」

湊はそれを聞くと、また驚く

「べつにいいけど」

湊が返事をする、なのはは嬉しそうに笑う

「お兄ちゃん…………湊お兄ちゃん…………えへへ」

湊はそんななのはの頭を撫でる

「それじゃ、俺は帰るよ」

湊がそういつても、なのはは湊の手を離さない

「…………また、会えますか？」

不安そうに尋ねるなのはに対し湊は安心させるように笑顔で言う

「また、あの公園で会えるよ」

湊がそい言うとなのはは湊の手を離す

「またね、湊お兄ちゃん!!」

一心不乱に手を振るの的是に対し、軽く手を振る湊

―― 次の日も湊お兄ちゃんは私に会ってくれた
―― 湊お兄ちゃんは私の話を何でも聞いてくれた　―― 私は
湊お兄ちゃんのことを何時も考えるようになってた

―― 私は湊お兄ちゃんさえ傍に居ればそれで良いって思えるよ
うになってた

―― 何時からだろう

―― 何時でもいい

―― 私には湊お兄ちゃんが全て

―― それだけでいい

―― 湊お兄ちゃんさえ良ければそれでいい

―― 湊お兄ちゃんは私を見てくれる

―― 湊お兄ちゃんは私の傍に居てくれる

―― 湊お兄ちゃんは私のことを何時も考えてくれている

―― 湊お兄ちゃんのためなら

―― 私は

――

湊はなのはとの出会いを思い出した

「――これは物語が変わるんじゃないのか？」

そんな不安を胸に湊はなのはを見る

久々に湊お兄ちゃんと呼べたのが嬉しいのか、湊と共にいることが嬉しいのか

嬉しそうに笑う、なのはを見る

「なあ、なのはちゃん」

湊の言葉になのはは止まる

「どうしたの、湊お兄ちゃん」

「ココアでも買ってやるよ」

湊が言うとなのはは一瞬驚くと直ぐに嬉しそうに笑う

「やっぱり、湊お兄ちゃんは私のこと考えてくれているんだね」

嬉しそうに言うなのはを見る

「――まあ、俺が修正すればいいや」

そんな甘い考えをしながら

「――彼女を見る」

――

そんな湊達とほぼ同時刻

2人の転生者、九条と高木は部屋に現れる

――何も無い空間から唐突に

「……追ってこないみたいだな」

高木が安心したように九条に言う

――が

九条はそんな高木の襟首を強く掴む

「どうして上條を見殺した!!」

高木は黙る

「上條と約束しただろ!!俺達で力を合わせてこの物語をハッピーエンドにかえるって!!」

何もしない高木に九条は言う

「『物語を変える計画』だって考えてきたのに……何で……」

九条は高木の襟首を離す

「…………『転生者殺し』」

九条は呟く様に言う

「あいつさえいなければ…………」

両手を力一杯握り締めながら

「あいつを…………上條の敵を…………！！」

九条がいい終わると同時に扉が開く

「お兄ちゃん？」

「風香、こんな時間にどうしたんだ？」

九条は部屋に入ってきた少女——九条風香に言う

「こんばんは、風香ちゃんお邪魔してるよ」

高木は作り笑いをしながら風香に挨拶をする

「こんばんは、高木お兄ちゃん、明日も学校なんだから2人共早くねるんだよ」

眠そうに風香は言う

「『何時も2人』は一緒なんだから」

「待て、風香!!」

部屋を出ようとする風香を九条は止める

「何時も俺達は『3人』だったろ」

九条が言うつと風香は首を傾げる

「風香のこと？」

「九条、これは……」

高木が九条を見る

九条の顔はだんだん青くなっていく

「お兄ちゃん、顔色悪いよ？具合悪いの？」

「……いや、何でもない。風香は早く寝るんだ」

「……?はい」

首を傾げながらも風香は大人しく部屋を出てい

「……高木」

静かになった空間になると、九条が口を開く

「俺達の敵は想像以上に厄介かもしれない」

九条の言葉に高木は首を縦に振る

――転生者殺しと転生者

――互いに交じり会った線は

――どちらかが消えるまで交じり会う

過去話は唐突に（後書き）

こんにちはーおbでーす

前書きでも書いた道理、記念番外編を投稿します!!

……何時かだけど

とりあえず、内容としましては

1、生徒会の一存の話を転生者殺しのキャラでやってまる

特別ゲストとして金髪の幼女登場

2、みなとキャット

朝起きたら湊の頭に猫耳があり、さらには尻尾まである……

そんな湊の話

特別ゲストとして金髪の少女が登場

このどちらかですね

特別ゲストは両方とも違いますよ

では、今回はこの辺りで

感想や、お気に入り登録、更にはメッセージ等くれると嬉しいです!!!

PSもついつの連載もよろしく!!!

キャラ紹介(主人公+) (無印) (10/16に少し修正) (前書き)

ただのキャラ紹介

キャラ紹介（主人公＋）：無印（10/16に少し修正）

名前：鳴海 湊

髪型：黒髪を伸ばしており耳が隠れるほど長い

見た目：かなりの美形、女装が似合う（アイギス談）

瞳の色：黒

魔力：無し（あるといえはるが使い方がわからない）

肩書き：転生者殺し

武器：アイギス

転生者殺しとして様々な物語に転生している主人公

転生者を恨んでおりどんな理由があろうと必ず殺す

物語を守るため等言っているが、本心は自分の姉を殺した転生者を殺すための力を求めるためだけに転生者と戦っている

重度のシスコンで、転生者になる前は毎日の様に姉の傍にいた

この物語では、学校では猫を被っており、いい子でいる

使用技（アイギスの力無し）

抜刀術：基本的な湊の技

アイギスと同調して能力を上げているため、目にも止まらぬ早さで相手を切る

といっても、アイギスの力が無いため、範囲は刀がどくまでの距離に限定され、1回しか切ることが出来ない

使用技（アイギス有り）

刹那：湊の抜刀術の強化版アイギスの力を使い一撃の威力も上昇している。

また、一瞬で3回切ることが出来るほどの早さでもある。

魔力線：アイギスの魔力を使い肉眼では見えないぐらい細いワイヤーを使い、相手を切る

相手が転生者以外でも使うことが出来るため、湊もよく使う

また、魔力線で切った魔法は切断され、無効にすることが出来る

数を重ねたり威力を上げたりすると白い線が見えるようになる

遠刀刹那：湊が多数の対象に攻撃する時に使う技

刹那と魔力線を同時に使い攻撃する

近距離は刹那

中々遠は魔力線で対象を切る

範囲が広く、避けにくい技のわりには威力が高いなどなかなかに万能な技

刹那乱舞：目の前の相手に魔力線と刹那をピンポイントに当てる技

範囲が狭いが、湊が使える技の中では威力が高い

万華鏡刹那：湊の周りを見境無く切り刻む技

周りに敵しかいない場合しか使えない

名前：アイギス

髪型：金髪で短めのポニーテール

見た目：10人中8人が街ですれ違ったら振り返るほどの美人（湊談）

スタイルもよく、背も高い

魔力の色：白

肩書き：死の神に仕えるメイド

武器：自分

タナトスに仕えるメイド

志望動機は楽そうだから

今は湊の武器をやっている

食べるのが早く、燃費が悪いため湊をよく困らせる

湊のことを『私の最後のパートナー』と称するほど相性がいい

また、湊の刀の師匠でもある

武器になった姿は日本刀で色は白

使用技

幻魔刀：自分の魔力で刀を作り、それを相手に飛ばしたり自分で持ったりする

見た目は武器になった自分と余り変わらない

性能は魔力線同様魔法を切れば無効にすることが出来る

魔力線：湊と変わらない

同調：パートナーである湊に自分の力の1部を一時的に与える

基本的に白コート状態がそうだが、相手が転生者以外の場合使わない

名前：高木

見た目：茶髪で少し長め

顔はイケメン（自覚無し）

武器：エボニー（デビルメイクライ）

転生者の一人

上條、九条とは転生前から親友

物語をハッピーエンドにするために戦う

とある理由により湊のことが嫌い

九条

見た目：金髪で長め

顔はイケメン（自覚無し）

武器：リベリオン（デビルメイクライ）

高木同様物語をハッピーエンドにするために戦う

湊のことを信頼しており、強い憧れを抱いている

九条風香

見た目：金髪で細めのツインテール

可愛いといった表現があう少女

なのは達とは面識が無く、

3年下でもある

転生者ではない

用語

転生者殺し：湊の肩書き

その名のとおり転生者を殺している

理由としては物語を変えないため

物語の修正：湊の目的でもある

実は以外と雑で、そこまで話を変えられなければ修正可能

ただし、転生者を全て殺しておかないと駄目

同調：対転生者用の能力

転生者の能力が強すぎる場合、湊にそれだけの力を与える

キャラ紹介（主人公＋） ・無印（10/16に少し修正）（後書き）

こんにちはー勦bでーす

湊の抜刀術の名前が刹那と言つのは理由があります

……それもまたいずれ

番外編その壹ラジオする転生者殺し(前書き)

初めての番外編!!

PV23000

総合評価190達成記念!!

生徒会の一存のパロディです

番外編その壺ラジオする転生者殺し

……いま、俺の前には、ラジオに必要な道具が並んでいる

スイッチをオンにするだけで、ラジオが出来るようになるまで準備
されている

何故かって？

番外編だかららしい

……意味がわからない

「……アイギス、本当にやるのか？」

俺が不安そうにアイギスに言うと、俺とは対称的に元気良くアイギ
スは言う

「当然よ！！番外編といえばラジオ、当たり前じゃない！！」

……そんな当然は消えてしまえ

俺はメンバーの顔を見る

上座にはアイギスが偉そうに座っており

隣にはなのはちゃんがべったりと俺にくっついており

対になる席にはフェイトちゃん（本編ではまだ未登場）がおり

アイギス以外が俺の膝の上にいる少女を見つめている

「どうしたの、お兄ちゃん？」

「「「誰！！！？」「」」

アイギスと首を傾げながら俺を見ている少女以外の声が重なる

「誰って、ヴィヴィオちゃんよ」

「いや、誰だよ！！」

「st s になったらわかるわ」

「先ずst s して何だ！！」

「10年後の話よ」

「10年後の話に出てくるキャラを連れてくるな！！！！」

もつやだこの女

何当たり前みたいな顔して10年後のキャラ連れてきてんだよ

「番外編だから」

……地の文を読むな

「とりあえず、今回のラジオはこのメンバーでやるわよ」

アイギスが各メンバーの顔を見る

……アイギスと目が合うと、ヴィヴィオちゃん以外のメンバーが目を逸らす

「大丈夫みたいね」

「……どこが!!?」「」

目を逸らしたメンバーで突っ込んだにも関わらず、アイギスはラジオの電源をオンにする

アイギス「アイギスのオールナイト物語!」

湊「……タイトルどころにかならなかったのか？」

オープニングBGM

アイギス「さあ、今夜も始まりました。アイギスのオールナイト物語」

なのは「まだ昼ですよ、アイギスさん」

アイギス「早速、お便りのコーナー!!」

フェイト「お便りなんて来てるんですか？」

アイギス「もちろん、沢山来てるわよ」

湊「本当かよ」

アイギス「さて、一通目のお便りわ」

ヴィヴィオ「何だろうね、お兄ちゃん」

湊「どつでもいい」

アイギス「『てんころの皆さん
」

湊「ちよつと待て」

アイギス「何よ、出鼻挫くなんて湊らしくない」

湊「てんころって何だよ」

アイギス「転生者殺しの略よ」

湊「……ネーミングセンス無いな」

アイギス「うるさい、続けるわよ」
「『てんころの皆さん、こんばつは
ー……』はい、こんばつはー……！」

湊「……恥ずかしい挨拶だな」

女性陣「こんばっはー!!」

湊「俺以外の共通認識!!?」

アイギス「『オールナイト物語、いつも、楽しく聞いてます』ありがとう」

湊「いや、嘘だろ!!今回が第一回放送だろ!!」

アイギス「私から見れば時系列なんてあつて無いものよ」

湊「……否定したいけど、現にヴィヴィオちゃん連れてきてるしな」

アイギス「じゃあ、お便りの続き読むわよ『皆さんに質問なんです
が、皆さんは、どんな告白をされたら嬉しいでしょう?僕は今、恋
をしているのですが、どんな告白をしたらいいか悩んでいます。教え
てアイねえ』」

湊「アイねえ?こんな中身子供なやつが?」

アイギス「うーん、難しい質問ね。でも、恋愛経験豊富な私に言わ
せれば」

フェイト「アイギスさんって、恋愛経験豊富なの？湊さん」

湊「……俺と手を繋いだだけで顔を真っ赤にしてたな」

なのは「何で湊お兄ちゃんはアイギスさんと手を繋いだの？」

湊「……なのはちゃん、何か怖いよ」

なのは「後でお話しよ、湊お兄ちゃん」

湊「……死亡フラグが立った気がする」

ヴィヴィオ「アイギスお姉ちゃん、何て告白すればいいの？」

アイギス「普通に告白すればいいよ」

湊「それはアドバイスじゃないだろー!!」

アイギス「フェイトちゃんはどっと思っつ？」

フエイトちゃん「ふえー！！……わ、私は好きですって気持ちを伝えるような告白をすればいいと思うな」

なのは「私もそれがいいと思うー！」

湊「フエイトちゃん、愛を伝えることを告白って言うんだから、それはアドバイスにはなっていない」

アイギス「なら、そういう湊はどんな告白をするのよ」

なのは「湊お兄ちゃんの告白」

フエイト「湊さんの告白」

ヴィヴィオ「お兄ちゃんの告白」

湊「当たって砕ける」

アイギス「リスナーのハートを何だと思ってるの！！？」

湊「いや、好きにすればいいじゃん、俺には関係ないし」

フェイト「リスナーに冷たすぎるよ!!」

湊「面倒だな、もういいや、わかりません」

なのは「わかりませんは流石に駄目だよ!!?」

ヴィヴィオ「お兄ちゃん、真面目に考えようよ」

湊「真面目にって言われても……告白なんかしたことないし」

フェイト「湊さん、告白したこと無いんだ」

湊「されたことならあるけどな」

なのは「湊お兄ちゃんに告白した人がいるんだ……へー」

フェイト「なのは、目が笑ってない」

アイギス「湊はお姉ちゃんが一番好きだもんね」

湊「自慢の姉さんだからな」

なのは「湊お兄ちゃんのお姉ちゃん？」

湊「こつちの話だ」

アイギス「さて、今回はこの辺りにしましょう」

湊「やっと終わりか」

なのは「お疲れさま、湊お兄ちゃん」

フェイト「楽しかったね」

ヴィヴィオ「次もやりたいね」

湊「番外編のもう1つの候補は俺が大変な目に合う話だからな、次もこれがいい」

なのは「じゃあ、湊お兄ちゃん、さっき言った道理に私とお話しよ」

湊「……俺、次の番外編まで生きてるかな」

番外編その壺ラジオする転生者殺し（後書き）

こんにちはー勦bでーす

番外編ってこんな感じでいいのかな？

書くのが楽しかった

さて、転生者殺しを評価してくださった方、お気に入り登録をしてくださった方どちらも本当にありがとうございます！！

次回は普通に話が進みます

というわけで、ギアス風次回予告を湊にやってもらいましょう

高木に九条

まさか、こんなにも早く転生者に会えるとはな

だが

あいつらも馬鹿ではない

俺に感付くとは

まあ、このていどなことでは負けないさ

そうだろ、アイギス

感想くれたら嬉しいです

P S めだかボックス連載予告投稿しました

めだかボックスを知っている方は見てくれたら嬉しいですよ!!

始まりは劇的に(前書き)

今回はいきなり物語が動き出す!?

……これは、動いたと言えるのだろうか

始まりは劇的に

転生者の1人である上條を消した翌日、湊は学校内を歩いているとなのはに声を掛けられる。

「湊さん！」

湊が声をした方を向く

そこには、嬉しそうな笑みを浮かべるのはと顔を青くしている九条、高木の3人がいた

九条と高木はやはり生存しているか

湊は2人の顔を見ると思い出す

なのはを家まで送ったあとのアイギスとの会話を

「湊、話があるの」

家に帰って早々にテレビの前にあるソファーに座った湊にアイギス

は椅子に座ると言う

「腹がへったとか言うなよ」

「それもあるけど、もう1つ大事な事があるの」

湊は呆れながらアイギスに言う

「何だよ、それ」

「さっき逃がした転生者達の魔力が途絶えたの」

湊は目を細める

先程の戦闘から高木達が逃げようとした時に湊はアイギスに高木達の魔力を追跡させておいたのだ

「魔力が途絶えたってことは、消えたのか？」

「ううん、消えたにしては唐突すぎるから」

「邪魔が入ったのか」

アイギスがいい終わる前に湊は静かに言う

「サポートタイプの転生者が居るか、それとも」

「『あいつら』が妨害してるか」

今度は、湊がいい終わる前にアイギスが言う

それを聞くと湊はため息混じりに言う

「あいつらは大人しく見てるだけでいいのに、なんでわざわざ関わってくるんだ」

「しょうがないわよ、あいつらからすればこの現状はつまらないんだから」

つまらないか

そんな理由で、物語を消してたまるか!!

湊はそれを聞くと湊は立ち上がる。

「お前はどつなんだ、アイギス」

湊はアイギスの方を向く。

アイギスは俯くと口を閉ざす

「……まあ、どうでもいいか」

興味無さそうに湊は言う

あいつらが関わっていようが、いなかろうが関係ない。

転生者は消すだけだ!!

「湊さん、聞きたいことがあるんです」

先日のことを振り返っている湊に高木は言う

「どづかしたの？」

優しい笑みを浮かべ、優しく湊は聞く

「上條のこと覚えてますか？」

高木はなのは達よりも一歩前に出て湊に言う。

湊のことを睨みながら。

湊はそれを聞くと右手を顎に当て、考える

「上條……？覚えてないな、彼がどうかしたの？」

嘘だけど

湊は上條のことを覚えている。

物語の修正により、転生者以外は皆、上條のことを忘れている。

正確に言えば、『存在してなかった』ことになる。

そのため、物語の住人は存在してなかった人のことなど覚えているはずが無く

また、本来物語の住人ではない転生者は忘れることはないのだ。

「っ！！……本当に覚えてないんですね」

「覚えて無いね」

湊が言っていると、高木は俯く

そのまま湊に背をむけ歩きだす

「おい、高木！！」

高木の後を追うように九条も歩きだす

なのはは2人を見ながら首を傾げる

「上條君って誰なのかな湊さん」

「……さあ、誰だろ」

『ヒント』は与えた

『あいつ』をおきびたすための餌になってもらたために

さあ、俺の手の平の上で踊ってもらおうぞ

転生者！！

湊はなのはと別れを告げると自分の教室に向かった

放課後、湊は生徒会の活動を行う

今日の仕事は職員室にある荷物を生徒会室に運ぶというものだ

だが、他の役員はそれぞれの仕事があるため湊1人で運ぶ事になったのだが

「ごめんね、わざわざ手伝ってもらっちゃって」

「……別にいいですよ」

ぶっきらぼうに彼　高木は言う

湊が荷物を運んでる時に偶然出会った高木が手伝うと言ったのだ

「そつえば、今日は九条君は居ないんだ」

「はい、あいつは今別の用事があるんで」

気まずい空気にならないように湊が話を振るが、どれもぶっきらぼうに高木は応える

そんなことを繰り返しながらアイギスから念話が送られてくる

(湊！！転生者の反応があった！！)

湊はそれを聞くと足を止める

「どうしたんですか、湊さん」

高木は急に足を止めた湊に合わせて足を止めると湊のほえを見る

なるほど、予想以上に行動が早いな

「九条君は今日用事があるんだよね」

湊が高木に言う。

「はい、ありますよ『絶対に外せない用事』が」

絶対に外せない、か

今日は物語が進む日なのか

九条は物語を変えるために動くだろうし

俺は高木が目の前にいるせいで動けない

まあ、予想道理だな

(アイギス、今から俺が言うとおりに動け)

湊がアイギスに念話を送ると同時に、高木が睨みながら言う。

「湊さんは『転生者』ですよね」

転生者は踊る。

湊の考え通りに。

律儀に踊る。

始まりは劇的に（後書き）

こんにちはー勦bでーす

今回は戦闘を入れる予定でしたが長くなりそうなのでパスしました

湊とアイギスが言う『あいつ』

高木が湊に断言した『転生者』

湊が高木に与えた『ヒント』

湊がアイギスに言った『指示』

とりあえず、次回で『あいつ』以外はわかる予定です

……予定ですけどね

さて、今回の次回予告もコードギアス風に

ではでは、湊よろしくー!!

予想以上に行動が早いな

まあ、問題なんか無い

俺にはアイギスが居るからな

PSめだかボックス連載はじめました

転生者は劇的に(前書き)

もう一人の転生者殺し登場!?

転生者は劇的に

「湊さんは『転生者』ですよね？」

高木は睨みながら言う。

「唐突だね、転生者って何だい？」

「言い逃れは出来ませんよ。確証ならありますから」

高木は自信満々に湊に言う。

対する湊は首を傾げ、何時も道理の笑みを浮かべる。

……その笑みが嫌いだ。

……『母さんを殺した奴』と同じ笑みが

(高木、あいつを確認した)

高木が湊を睨んでいると九条からの念話が送られてきた。

(っ！……そうか)

「どうかした？」

「いえ、何でも」

湊は心配そうに声を掛けるが高木は冷たく返す。

……湊さんは転生者殺しじゃない

……いや、そう簡単に決め付けるのは早計だ

……湊さんが転生者なのは俺の理論があつてれば間違いない

あつていれば。

高木はゆっくりと目を瞑る。

自分の親友であり、危険を承知で自分の頼みを聞いてくれた九条のことを心配しながら

湊がアイギスに念話を送る前、カップルであろう2人が町を歩いていた。

「何で初めての戦闘の時に介入しなかったんだよ」

短い黒髪をツンツンに伸ばした少年が少女に言う。

「初めから介入するよりも後々介入していったほうが面白いじゃない」

少年の不満に短い黒髪をした少女が応える。

「後々って言うほど後じゃないだろ、さやか」

「だって暇なんだもん、スザクだって暇って言うてたじゃん」

少女 さやかは少年 スザクにつまらなさそうに言う。

この2人は転生者だ。

本当なら後半から介入しようとしていたが暇だったため早めに介入することにしたらしい。

2人が歩いていると1人の子供と目が合う。

その子供は目が合う同時に持っていた風船を手放す。

「あっ！」

子供が風船に対して手を伸ばすが届かない。

「ほら、スザク」

「わかってるよ」

スザクは風船に手を伸ばす。

すると、風船は重力に逆らうかのように下降しだす。

子供が下降してきた風船を取ると風船は下降を止めて、普通の風船のように上昇しだす。

「いいことしたじゃん」

からかうようにさやかが言うと、言われたスザクは気恥ずかしそうに應える。

「ほ、ほら、暇だし介入しにいくんたる」

「何に介入するきだ」

スザクに応えたのはさやかではない。

スザクが声をしたほう　　自らの背後を向く。

そこには先程には無かった切れ目が現れて、そこから真っ白なコートを着た人物が現れる。

「……あなたは誰ですか？」

さやかが睨みながら言う。

「名前は秘密だ、だが肩書きだけなら教えてやるよ　　」

真っ白なコートを着た人物は『何も持ってない左手』でさやかに指差して言う。

「『転生者殺しだ』……！」

機械で変換されたような声で転生者殺しは言うと、左手で指を鳴らす。

すると

「な、何だよこれ!？」

青かった空は徐々に灰色になり、空を飛んでいた鳥は動きを止め、風船を持っている少年の動きも止まる。

「ここでなら私は思う存分『遊べる』」

「っ!」

2人が周りの変化に戸惑っているところを突いたのが、一瞬で転生者殺しは背後に回り、スザクの後頭部を左手で殴ろうとする。

「させない!」

いち早くそれに気付いたさやかは足下にあった石ころをとり、スザクと転生者殺しの間に投げる。

すると、石ころが光りだし、大きな壁になる。

「くっ! 『能力者』か!？」

転生者殺しは後ろに短く飛ぶ。

「転生者殺しって言うぐらいなんだから俺たちが転生者だってことを知ってて殺しに来たのか？」

スザクは転生者殺しを睨みながら言う。

「そうだ。私は転生者であるお前達を殺しに来た」

転生者殺しがそう言うと、自らの周りに真っ白な日本刀『幻魔刀』を4本作り出し、自らの周りに3本、1本を左手で取る。

「まあ、今回だけは特別に見逃すけどな」

「「はあ!?!」」

急に言いだした転生者殺しの言葉に2人は驚く。

「どうした、逃げないのか?…:…逃げないなら」

そう言うとスザクの前にあった壁に無数の白い線が走る。

「切り刻む」

その言葉と同時に線が走ったところが切れる。

「っ!上等!」

スザクがそう言うと転生者殺しを右手の人差し指で差す。

「逆にあんたを殺してやるよ!」

すると、壁の破片が高速で転生者殺しに向かう。

「協力するわ、スザク!」

さやかが言うと破片が鋭くなる。

転生者殺しはそれを見ると自らの周りにあった幻魔刀を破片に向

かつて飛ばし、新たな幻魔刀を作る。

幻魔刀が触れなく、すれ違っただけでも破片に切れ目が入り、そこから切れていく。

「甘い!!」

切れた破片は勢いを殺さず、そのまま転生者殺しに飛んでくる。

「成る程、厄介だな」

それだけ言うと左手で握った幻魔刀を更に強く握って構える。

「だが、それだけだ」

そのまま幻魔刀を一振りすると全ての破片に無数の切れ目が入り、そのまま切れる。

「切手も無駄よ!スザクの能力と私の能力を使えば切った破片も、切られた破片も新たな武器として使えるんだから!!」

さやかが言うのと同時に転生者殺しは上へ飛ぶ。

もちろん破片も転生者殺しを追うように上へ飛ぶ。

その数はもはや数えきれないくらいだ。

転生者殺しは少しして止まるとまた幻魔刀を一振りする。

すると破片は切れて、また鋭くなる。

それを確認しては進み、少ししては止まり切り刻み、また進を繰り返す。

すると

「……くっ！」

「大丈夫スザク!？」

スザクは急に倒れると、さやかはそんなスザクに近づく。

「もう限界か」

転生者殺しはそんな2人の前に降下する。

「スザクに何をした!？」

さやかが睨みながら言うと転生者殺しは上を向く。

「破片を見る」

さやかは破片を見る。

すると、見てすぐに気付く。

「遅い!？」

破片のスピードははじめのような高速ではなくなっていた。

「能力の処理に脳が追いついてない。無理に使ったからな」

転生者殺しは2人に背を向ける。

「……今日の所は私が殺さないでやる」

それだけ言つと歩きだす。

「くっ！」

さやかは悔しそうな表情を浮かべてスザクに肩を貸す。

さやかとスザクの2人で勝てなかった相手にさやか1人で勝てるはずかない。

「まあ」

転生者殺しは足を止める

さやかはそんな転生者殺しを見ながら歩きだそうとする。

が

「っ!!!!これは!?!」

さやかは動こうにも指一本動かせない。

まるで『何かにきつく縛られてるような』感覚だ。

「まさか!?!」

さやかは上を向く。

そこには転生者殺しを追い掛けていた無数の鋭い破片があり
操るものもいないまま

真っ直ぐさやかを指していて

「き、きゃあああああ！！！！」

「

さやかは泣きながら悲鳴を上げた。

そんな悲鳴を聞きながら転生者殺しは見ずに言う。

「私は『転生者を殺すことはできない』でも自殺させることなら
できる」

ゆっくりと目の前に現れた切れ目に歩きだすと、最後の一本踏み
出す前に振り向く。

そこには音などなく無数の真っ赤な破片があった。

「彼に消されるよりはましだと思って」

転生者殺しは歩きだす。

転生者だったものは灰にはならない。

転生者殺しがその場から消えると空は青に戻り、止まっていたも
のは動きだし、無数の破片は消えていた。

「よくわかったね、俺が転生者だったこと」

湊は睨みながら高木に言う。

高木はそれを聞くと驚きの表情を見せる。

「聞かせてよ、俺が転生者だってわかった理由」

湊はお構いなしに言う「高木は言う。」

「上條のことを覚えてたからです」

「あの時俺は覚えてないって言ったけど……」

「その前です。あなたは上條のことを『彼』と呼んだ」

そう

湊は上條のことをさりげなく彼と呼んだのだ。

湊はこれをヒントとして与え、高木はそれを見事に見抜いたのだ。

わかりやすそうでわかりにくく、だからこそ湊の凡ミスと高木は捕らえたのだ。

「でも、だから転生者ってのは極論すぎない？」

「それに関しては俺の予想です、消された転生者のことは転生者しか覚えてないんじゃないかって考えたんです」

「成る程、予想的中じゃないか」

湊は笑みを浮かべながら言う。

「それで、湊さんにお問い合わせがあるんです」

高木は湊を睨むのを止めないまま言う。

「俺達と協力してくれませんか？」

少しの間お別れかもな

アイギス

転生者は劇的に（後書き）

こんにちはーおbです

いやー、能力者てか出ましたね（他人事のように

とりあえずは、次回更新までにキャラ紹介のところを追加します（書き忘れてました）

PS私が書いてる連載の一つ『リリカルなのは忘却の』をしばらくの間凍結することにしました。

運命は劇的に（前書き）

後書きにゲスト登場！！

今回は戦闘無しの会話パートです。

……この話必要あるかな？

前回の後書きに書いたキャラ紹介の追加は転生者側紹介のさいに書きます。

運命は劇的に

湊は生徒会の仕事を終わらせると、高木と共に九条の家に向かった。

「九条が転成者殺しを確認後、今回の戦闘のデータを撮ってきたようです」

湊と少し距離を保ちながら歩いている高木が言う。

「意外だね、高木君の話聞いたかぎりだと九条君1人じゃ転成者殺しに太刀打ち出来ないと思ったんだけど」

「今日は原作が進む日でしたので、他の転成者が動くことを予想して九条は隠れさせてたんです」

……他の転成者を餌にして転成者殺しを誘き寄せたのか。

湊は軽く笑みを浮かべながら考えると、高木が足を止める。

「ここが九条の家です」

それだけ言うと高木はチャイムを押す。

すると、少しした後家の扉が開かれる。

「こんにちは風香ちゃん。お兄ちゃんはいるかな？」

風香と呼ばれた少女は首を縦に振ると言う。

「お兄ちゃんは部屋にいるよ」

「ありがとう」

高木は風香にそれだけ言うと家に入っていく。

……それだけ転生者殺しについての情報が気になるのか。

「湊さん？」

湊が高木の背を呆れながら見てると風香に声を掛けられた。

湊と風香は知り合いだ。

昔、迷子になっていた風香を湊が助けたのだ。

それから湊は九条と出会い、高木と出会ったのだ。

湊からすれば風香は転生者と関わる切っ掛けをくれた人物になる。

「こんにちは、風香ちゃん」

湊は風香の頭を軽く撫でる。

この時、アイギスの魔力で作ったいざというとき用の魔力線を頭に仕込ませる。

……これで、風香ちゃんの間所も把握できる

湊とアイギスの仮設の中には、高木達は3人ではなく4人で行動しているというものがある。

その内の1人、上條は消したが、まだわからない転生者はサポートタイプの可能性がある。

サポートタイプは見つけるのが面倒なため、まずは手当たり次第に高木と九条の2人に強く関わっている人物を調べることに湊はしたのだ。

……後は、アイギスに任せるか。

湊は風香の頭から手を退かすと高木の後を追った。

湊が九条の部屋に着き、高木は九条に湊が転生者であり、自分達の味方だということを伝え、その後転生者殺しの戦闘ビデオを見ることになった。

湊達の前に大型のモニターが現れる。

「これが、今回の戦闘データだ」

九条が言うとモニターから映像が流れだす。

はじめは灰色になった空から始まる。

「これは？」

九条が早速高木に尋ねる。

「はじめは神社で見張ってたんだけど、急に空が灰色になるから急いで録画を開始したんだ」

高木が九条の疑問に答えると湊が灰色の空に対する仮説を言う。

「これは……結界だね。転生者殺しが張ったのかな？」

「最後まで見ればわかると思いますよ」

九条はそれだけ言うとモニターに集中する。

モニターでは既に転生者殺しと転生者の戦いが始まっていた。

「神社のすぐ傍だったから走って行ったんだ」

「走って？」

湊は九条の言葉を聞いて理由を尋ねる。

「転生者殺しって言うぐらいなんだから転生者の魔力を察知するぐらい出来るだろうって予想したんで、九条には余り魔力を使うなって言っていたんです。ただ、強い魔力じゃなければいいみたいなんで、モニターを出したり、念話をしたりぐらいなら大丈夫ですよ」

……なるほど、不気味なぐらい当たってるな。

アイギスは戦闘タイプのため察知等のサポート向きの能力は不向きだ。

……と言つても、転生者に引きを取らないぐらいだし、問題はないけど。

モニターに映っている転生者殺しを見ながら高木は目を細めながら言う。

「今回は日本刀を持ってないんだな」

転生者殺しは自分の魔力で作った幻魔力で戦っている。

戦闘もいよいよクライマックスに入ると転生者殺しは破片と転生者の間に移動する。

「……ここからは、グロ注意ですから、そういうのが駄目なら湊さんは見ないほうがいいですよ」

九条は思い出したのか、俯きながら左手を自分の口に当てると不快そうに言う。

すると、モニターに映し出されている転生者の1人が倒れる。

「っ！ 止めるっ！！」

高木が慌てて叫ぶと九条は言うとおりにする。

「倒れた奴を大きく映してくれ」

すると、モニター一杯に倒れた転生者が映し出される。

……気付いたか

「やっぱり」

高木が言っていると湊も首を縦に振る。

そんな中、九条だけが2人の顔を交互に見ながら首を傾げる。

「九条君、よく転生者を見てごらん」

湊がモニターを見ながら言っていると、九条もモニターを集中して見る。

すると、違和感に気付く。

「……薄ら、白い？」

そう

倒れた転生者は本当に薄らとだが白いのだ。

それこそ、言われなきゃ気付かないほどに。

……高木がそれに気付くとはな

湊が内心高木を誉めている。

流石にモニターに映し出されている荒い画像では判別出来ないが、この白いのは魔力線だ。

転生者殺しが始めに幻魔刀を相手に飛ばしたときに配置していたのを使ったのだ。

モニターに映されていた画面が戻り、そのまま再生される。

そして

最後のシーン、転生者の死に様が映し出される。

「……酷いね」

湊がモニターから目線を外しながら言う。

モニターには高木が止めると言ったため画面一杯に転生者の死骸が映し出されている。

だが、死骸と言うのを戸惑うほどに肉片に無数の破片が刺されており、徐々に地面には血が広がっている。

「……おかしい」

高木がポツリと言うと湊と九条は高木を見る。

高木は1人モニターを凝視しながら言う。

「灰にならない」

高木の一言で九条は気付く。

「言われてみれば！」

……まあ、気付かれてもしょうがないか

湊は俯きながら考える。

……今回ばれたのは、察知能力の低さ、幻魔刀、恐らくだが、魔力線ぐらいか

まあ、支障は無いな。

湊がそんな考えをしてるとポケットに入っていた携帯が振動しだす。

2人が湊を見つめるなか携帯を取り出す。

そこには『高町なのは』からの着信があった。

「ごめん、少し席を外すよ」

湊は立ち上がると部屋から出て廊下で電話にでる。

「もしもし、どうかした、なのはちゃん」

「湊お兄ちゃん、さっきアイギスさんにあっただんですけど……」

（おい、アイギス）

なのはからアイギスの名前が出た瞬間に念話を送る湊。

(偶然よ、偶然)

白々しくアイギスから念話があるとなのはが言う。

「今日は晩ご飯を湊お兄ちゃんの家で食べてもいいって言われたんだけど……」

(晩飯を作るのは俺なんだぞ？ 何勝手にお客さん連れてこようとしてるんだよ！)

(なのはちゃんだって湊お兄ちゃんが作るご飯をだべたいに決まってるじゃない、だから作って上げなさい)

……偉そうに言うな！

湊は左手の平で頭を支えながらなのはに言う。

「なのはちゃんの家族がiiiiって言ったらな」

「お母さんがiiiiって言うてくれたよ！」

……許可とってたのかよ。

湊はため息を吐きながらアイギスに念話を送る。

(なのはちゃんは何を食べたいと思う?)

(ハンバーグね)

(それは、お前が食べただけだろ！)

……子供っぽい趣味しやがって！

(本気よ、なのはちゃんみたいな子供は皆ハンバーグが大好きなはずよ)

アイギスが湊に自信満々に念話を送り、それを聞いた湊は疑いながらもなのはに言う。

「じゃあ、ハンバーグでも作るか」

「本当に!？」

湊がハンバーグと言ったらなのはが嬉しそうに言う。

湊は苦笑いを浮かべながら言う。

「本当だ、少し遅くなるから先帰ってて」

「湊お兄ちゃん帰り遅いの?」

少し暗い声でなのはが言う。

「生徒会の仕事はもう終わってる時間でしょ？」

「家にいないなら何処にいるの？」

「誰かの家？」

「女の人なら」

「九条君の家、少し用事があった寄ったんだ」

なのは何か言う前に湊は続けて言う。

「今から買い物するから、だいたい20分後には家に着くからア
イギスさんと一緒に待ってて」

「……わかりました」

なのはの返事を聞いて電話を切ると部屋に戻る。

「ごめん、用事が出来たから家に帰るよ」

それだけ言って部屋から出ようとする湊を高木が止める。

「一言いいですか、湊さん」

湊は何も言わずに足を止める。

「俺は、あなたを疑ってます」

っ!?

湊はそれを聞いて部屋から出る。

湊は既に疑われている理由を予想できている。

転生者殺しは2人いる

高木はそう仮定したんだろう。

面白いよ、高木

湊は静かに笑いながら歩く。

邪悪な笑みを浮かべながら。

運命は劇的に（後書き）

こんにちはー勦bでーす

湊「こんにちは、湊です」

今回のゲストは『病みつき六課』に引き続き、元神魔王シリーズを書いている『パワード・マウンテン』さんのオリキャラ、ミヤさんです！！

ミヤ「引き続きよろしくー！」

湊「まあ、よろしく」

ミヤ「今回はどうい話だったんだ？」

意味が無い話ですね。

湊「そんなもを書くなよ」

まあまあ

ミヤ「なのはさんが登場したけど……子供のころから“ヤ”ってるんだな」

湊「ミヤさんもなのはちゃんから大変なめにあってるんだろ」

ミヤ「じいつのせいだな」

スツ ミヤさんが本を取り出す音

バン 本を机に軽く投げる音

チラツ 湊と私が見る音

サツ 私が目線を反らす音

湊「『月刊恋愛の友』ねえ」

ミヤ「補佐はこれを世に広めないうちに日夜戦ってるぞ」

隊長補佐は何と戦っているんだ……

湊「隊長補佐は、作者が書いている『病みつき六課』及び『病みつきフェイトシリーズ』の主人公だ」

ミヤ「説明お疲れ」

説明乙

湊「俺がやらないで誰がやる」

アイギス「私が」

湊「お前は一番無い！」

ミヤ「何時の間にいた!?!」

アイギス「さあ、早速やるわよ。『アイギスのオールナイト物語』」

「！」

タイムアウトです

アイギス「なん……だと!？」

ミヤ「あー、まあ『元神魔王シリーズ』よろしく!!」

プレゼントが無いとぐだるな……

湊「お前の文才じゃ、プレゼントあるなし関係ない」

PS病みつきティアナ投稿しました!!

また、私の作品の後書きにゲストを出させてやると言ってくださる方大募集!!

プレゼントも大募集!!

ミヤ「だから、プレゼントはもらうものだ!」

戦闘は劇的に(前書き)

無印最後(予定)の転生者登場!!

戦闘は劇的に

夕食を食べに来たのはを家まで送り、自分達の家に戻るためにゆっくりと歩いている湊とアイギス。

「転生者殺しが転生者と組むなんて……」

「やっぱり湊は面白いことを考えるのね」

アイギスは湊の今日の出来事を聞いて、楽しそうに笑いながら言う。

「まあ、怪しまれたままにしとくのも危ないしな。高木の

感の良さは異常だから、それを誤魔化すためにも仲間になろうとしたんだが」

「意味は無かったと」

湊が言う前にアイギスが言う。

意味が無いわけではない

今はまだ意味が無くても、自分の首を締めることになったとしても

最後に笑うのは、俺だ

「あなたの言うとおり九条の相手をしなかったけど、本当にあれでよかったの？」

アイギスは首を傾げながら言う。

今更だが、あの時戦っていたのはアイギスだ。

湊はアイギスが居ないと転生者殺しとしての力を得られないが、アイギスは1人でも転生者殺しの力を得ることができる。

だが、アイギスは直接転生者を消すことが出来ないため、今回のように『自殺』のような自らの手では無い方法で転生者を殺さなければならぬ。

これも、タナトスが言う『神のルール』というやつだ。

「九条にはやってもらうことがあるからな」

「やってもらうこと?」

湊の意味深な言葉に首を傾げながら聞こえようとするアイギス。

だが

「ッ! 湊、転生者が力を使った!」

「わかった」

湊はそれを聞くとアイギスの手を取り近くにあった人気が無さそうな細い道に向かって走りだす。

アイギスが指を鳴らすと切れ目が現れる。

「アイギス!!」

「わかってるわよ」

アイギスがゆっくりと目を閉じる。

「『同調開始』」

2人が同時に言うと、湊の姿が転生者殺しに変わり、アイギスは日本刀へと姿を変えた。

湊はそのままの勢いで切れ目の中に入っていった。

「だから、俺はフェイトちゃんに協力しただけで!!」

「だから、何であんたがフェイトの名前を知ってたんだよ!!」

夜の公園に3人の少年少女がいた。

公園といっても、それは下にあり本人達は皆空にいる。

金髪の少女 フェイトは2人を見ながら慌てていた。

「ア、アルフ話だけでも」

「黙ってなよフェイト！こんな怪しい奴は私が黙らせるから！！」

アルフと言われた女性は少年に向かって拳を振るう。

少年は両手をクロスしてその一撃を防ぐ。

「だから、俺は怪しくないって！！」

少年の両手には真っ黒なグローブを付けているだけだ。

「俺はただフェイトちゃんを助けたいだけで」

「嫌い！！」

アルフは少年をひたすら殴るが、どれも少年に止められる。

「信じてくれよ！！」

少年はアルフの拳に合わせて拳を振るう。

「くっ！！」

アルフはあっさりと何メートルか先に飛ばされる。

「アルフ！！」

フェイトは飛ばされたアルフの元に向かう。

「俺の名前は沢田光秀」

少年は飛ばされた自分を睨んでいるフェイトを見ながら言う。

「君達を『救いたいと思う人』だよ」

少年 沢田はゆっくりとフェイトに近づく。

「はっ！つまらねえ茶番だな」

「なっ！！」

そんな沢田とフェイトの間に下から一発の銃弾の形をした魔力弾が走る。

沢田は声がした方を見る。

そこには、真っ黒なコートを着て左手に持ったマスケット銃を上に向けながら笑っている男がいた。

「はっ、茶番は終わりだ！！」

男は高度を上げながらマスケット銃を捨てる。

すると、マスケット銃が男の前に現れ、捨てられたのは灰になり、消えていった。

男はフェイトと沢田の間に立つと口を開く。

「俺の名前は平和島直也」

男 平和島は沢田にマスカッター銃を向ける。

「依頼者のために、てめえを殺す」

平和島はその言葉と共にマスカッター銃から魔力弾を撃つ。

沢田は右手を握り、魔力弾を殴る。

すると、その魔力弾が跡形もなく消えた。

「依頼者……？」

「それは誰なんだ」

平和島を睨み付けながら沢田は構える。

「応えなくても思ってたのか」

平和島も同様に沢田を睨み付けながらマスカッター銃を捨て、新しいの手にする。

「だったら」

「言っても意味はねえ」

2人が同時に言うと、沢田が平和島の懐に入り右手で腹目がけて拳を振るう。

「力づくで聞くまでだ!!」

そんな沢田の拳と平和島の間にはマスカッター銃が現れ、それを平和

島は右手で取ると沢田の頭に合わせて撃つ。

沢田は平和島が撃つより一瞬早く後ろに下がり、それをかわす。

「てめえはここで死ぬんだからな」

平和島は先ほど撃つたのを捨て新しいのと取り替える。

「……何なの、この人達」

フェイトは後ろでいきなり現れた2人の攻防を見ながら呟いた。

何故か自分の名前を知っていて、自分を救う者と言いきいきなり現れた少年、沢田。

そんな沢田を依頼者のために殺すと現れた男、平和島。

アルフもフェイト同様2人を見ていたが、考えてることは違った。

「今のうちに逃げよう、フェイト」

自分をいとも簡単に吹き飛ばした沢田に、その沢田と同等もしくは格上である可能性が高い平和島。

この2人の戦いの傍にいたら自分達もとばっちりを受けるのではと考えたのだ。

フェイトはアルフの言葉を聞き自身もその考えに至と大人しく逃げることにした。

だが

「そう簡単に逃げれると思うなよ」

平和島は左手を沢田、右手をフェイトに向ける。

「悪いなあ、俺としても面が割れるのはよくないんだ

「ここで大人しく死んでもらうぜ」

平和島のその一言でフェイトとアルフはそれぞれ黒色のバインドに捕まる。

「ッ！！」

2人共バインドから抜け出そうとする。

「フェイトちゃん！」

沢田は急いでフェイト達に駆け寄ろうとするが、平和島がそれを止める。

「てめえが動いたらあいつらを殺す」

「くっ……！」

平和島の卑劣な言葉に沢田は言うことを聞くしかない。

そんな2人は気付かない

この戦いを見ているものが居たことに

「悪いけど、彼女達に死なれるのは困る」

この場にいる4人が機械で変換されたような声を聞く。

すると、フェイトとアルフが捕まっていたバインドに白い線が走り、切れる。

「……殺すのはお前じゃない」

フェイト達の前には、真っ白なコートをきて、フードを深く被り顔を隠している人物が立っていた。

「殺すのは私だし殺されるのはお前たちだ」

「……誰だてめえ」

平和島は視線を変え睨み付けながら言う。

「名前は秘密だ」

平和島は視線を変え睨み付けながら言う。

「でも、肩書きなら教えてやるよ」

ここにいる全員が見つめるなか、沢田と平和島に左手に持っている鞘を向けながら言う。

「『転生者殺し』だ」

転生者殺し

湊はこの場にいる2人の転生者に言う。

「転生者殺し……？　まあ、てめえがなんだろうが目撃者は殺す」

平和島はゆっくりとそれぞれの両手で持っているマスケット銃を湊に向ける。

「させるか！」

沢田はさんな平和島の後ろに近づき拳を振り上げる。

「まあ、先ずはてめえからだけだな」

平和島が言うと、左手に持っている銃を沢田の額に合わせる。

沢田は平和島が撃つ前に銃を右手で掴み銃口を反らす。

「チッ！」

平和島は忌々しく舌打ちするとマスケット銃から手を離し、沢田から距離を置こうとする。

「遅い！」

沢田は平和島が離れる前に顔面に向かって左ストレートを決める。

それを受けた平和島は公園に向かって勢い良く落ちていき、後を追うように沢田も行く。

そんななか湊はフェイト達を見る。

「お前達は早く帰れ」

だが、そんな湊に対してアルフは顔面を狙って拳を振るう。

湊は何とかそれに反応して後ろに軽く飛んでかわす。

「アルフ!？」

「……どういうつもりだ」

フェイトはアルフの突然の行動に驚き、湊もまた驚く。

「あんた、平和島とかいうのが来る前からここにいたろ」

アルフは湊を睨みながら言う。

「……いた、だからどうした」

本来なら助けるべきだったが、平和島の乱入により出るタイミン
グを逃し、またこのままどちらか弱った方を消せばいいと考えたた
め湊は出ずにこの場を見ていた。

「どうもしない!でも、あんたがもつと早く出て来てくれたらフ
ェイトは怖い思いをせずにすんだんだ!」

アルフは拳を構えながら言う。

やばいな

(アイギス、あいつは転生者か)

湊は内心焦りながらアイギスに念話を送る。

（原作キャラよ

）（だから、魔力線も禁止）

湊は『転生者殺し』であり、『転生者』ではない。

転生者だったら相手を選ばずに全力で戦えるが、転生者殺しである湊は転生者にしか全力を出すことが出来ない。

湊の力は基本的にアイギスが関わっている。

そのため、全力を出せないというのは『一部のアイギスの力が使えない』ということだ。

この状態になると最悪、湊の攻撃手段は左手に持っている鞘だけになる。

最悪の場合は今のような『原作キャラが相手の時』で『原作キャラが近くにいるとき』は魔力線も使うことが出来る。

「アルフ」

湊が内心焦っていると、フェイトがアルフと湊の間に立つ。

「フェイト、そいつに近づいたら」

「黙ってて！！」

そうとう頭にきてるのか、フェイトは声を荒げて言う。

「この子も原作キャラだよな、戦うといつたらどつするか

湊は更に焦ると、フェイトは湊に頭を下げる。

突然の行動にこの場にいた3人が驚く。

「助けてくれてありがとうございます」

「えっ？……ああ、別にあれぐらい」

フェイトを殺されたら困るのは湊だ。

そんな湊からすれば助けるのは当たり前だ。

フェイトは頭を上げると湊の顔を見る。

だが、フードを深く被っているためよく見えない。

「……お前達は帰るといい

「ここは危ない」

湊は下を見る。

公園では未だに2人が争っている。

「わかりました

「行こう、アルフ」

フェイトとアルフの足元に魔方陣が現れる。

アルフはため息を吐くとフェイトの言つとおりにする。

「また」

フェイトは湊をじっと見つめながら言つ。

「また、会えますか？」

湊もフェイトを見つめながら言つ。

「さあ、どうだろ」

湊が言い終わると、魔方陣が消えて2人の姿も消えた。

会わないほうが言い

湊としてはこれ以上原作キャラとの関わりを避けたいのだ。

はじめから仲が良かったのはともかく、転生してから新しい原作キャラとの出会いなんて湊は求めていない。

そんなことを考えながら湊は転生者達に近づいてく。

公園では既にボロボロの2人が距離を保ちながら立っていた。

湊はそんな2人の間に立つ。

(アイギス、平和島とかいう方に魔力線を忍ばせとけ)

(沢田には?)

(ここで消えてもらう)

湊は平和島が沢田を殺すように依頼した人物が気になっている。

もしかしたら、その依頼者は『あいつら』の可能性があるからだ。

「チツ！2対1か」

平和島は舌打ちをすると足元に魔方陣を展開する。

「わりいな、今回は帰らさせてもらうぜ」

「逃げる気か！」

沢田が一步踏み出した瞬間に沢田の前の地面に白い線が入り、切れる。

「わるいな、お前には消えてもらう」

湊が魔力線を使い地面を切ったのだ。

平和島はそんな2人を見ながら高笑いをする。

「ははははっ！！何だてめえらは敵同士だったのかよ

「まあ、関係ねえな

「てめえらは俺が殺す！！」

湊と沢田を睨んでいる平和島と魔方陣が消える。

それと同時に沢田の前に1人の女が現れる。

「沢田、そろそろ時間です」

女は沢田の手を取ると魔方陣を展開する。

あいつも転生者か？

湊としても逃がす訳にはいかないため左手を沢田に向ける。

袖から魔力線を出して2人を捕らえようとするが、女を中心に展開された薄い赤色の魔力の壁により邪魔される。

「なっ！」

「それでは、また会いましょう」

女は男なら誰もが見惚れるような美しい笑みを浮かべながら言う。

「転生者殺し君」

「ッ!!」

湊が何か言おうとする前に2人の姿が消えた。

転生者殺しを知っていた!?

「湊、あの女は」

アイギスは湊に真剣な口調で言う。

「魔力線を弾いた時点で確定だ」

魔力線は本来、その物語にある『不思議な力』を切断して無効にする力を持っている。

この物語なら『魔力』だ。

そして、その魔力線で切断できなかったということは

「間違いない、あの女は」

『あいつら』の1人

「『神の使い』だ」

神の使い

アイギスのような存在

転生者に力を貸し、その力を利用するもの。

アイギスの『敵』

湊は目の前に現れた切れ目の中へと進んでいく。

新たな『転生者』と現れた『あいつら』のことを考え、次の手を考えながら。

楽しそうな笑みを浮かべながら

戦闘は劇的に（後書き）

こんにちはーおbでーす

これで無印の転生者は全て出ました。

……追加するかもしれませんが

さて、次回は転生者側の紹介になります。

早く投稿したいです。

PSそろそろ番外編やります

転生者紹介：無印（一部設定追加）（前書き）

適当です。

他にも書いてほしい項目などがあれば教えてください！！

転生者紹介：無印（一部設定追加）

名前：転生者殺し

中の人：湊（アイギス同調時） / アイギス

見た目：真っ白なコートを着ており肌の露出は0に等しい。

魔力ランク：S

魔力色：白

武器：アイギス（湊）、幻魔刀、（アイギス）

湊がアイギスの対転生者時の姿。

使える技や術は2人のものと更にプラス されている。

元々はコートを着る必要がなかったが、顔を割られたら面倒なことがあったり、見張られているときにアイギスにコートを着させて潔白を証明したりなど以外と便利な時がある。

湊はこの姿が嫌だが、アイギスの主人でもあるタナトスの趣味とすることもあり変えるのはもはや諦めた。

技

終刀刹那：刀を鞘に収める瞬間に自分が指定した範囲を追加で切断する。

中距離までなら切断可能。

幻魔刀刹那：幻魔刀を飛ばして攻撃する。

幻魔刀に触れなくても多少離れた場所を切ることが可能

他の刹那系統の攻撃に追加で使うことができる。

術

ミラージュカウンター：魔力線で自分そっくりな人形を作りそれで攻撃を防ぐ。

人形は敵の攻撃に触れたり転生者殺しの指示により魔力線に戻り周りのものを魔力線で掴んだり、切断したりできる。

名前：高坂享也

武器：槍（名称不明）

湊が物語に来てはじめて消した転生者。

転生する権利をえてリリカルなのはの世界に自ら指名した。

なのはの物語をハッピーエンドにすることが目的だった。

かませ犬にすらならなかったが、実力はそこそこある。

だが戦闘タイプの無印転生者の中では最も弱い。

名前：上條 当夜

武器：アイボリー（デビルメイクライ）

魔力ランク：SS

魔力色：青紫

2人目の犠牲者。

高木、九条とは転生前からの親友。

リリカルなのはとデビルメイクライが好きで、転生先を選ぶときはどちらにするが悩んでいた。

デビルメイクライに転生しても原作ブレイクしにくそうなうえに主人公が既にチートということもあり断念、リリカルなのはの世界に転生した。

小学校の入学式時になのはと出会い（正確には見ただけ）一目惚れ。

なのはを幸せにするために努力することを決めた。

が、原作には登場していきなせになのはと必要以上に仲がいい湊のせいで叶えるのは難しいと判断。

湊に接触しているうちに湊が転生者じゃないかと仮説を立てては高木と九条に話していた。

（能力：観察系（名称不明））

湊の魔力線を見切れるほどの観察能力の高さであり上條の能力。

最終的にはこの能力で高木達を何度か救った。

名前：高木しげる

武器：エボニー（デビルメイクライ）

魔力ランク：SS

魔力色：青

転生者側の主人公的キャラ（予定）

その感の良さと運の良さで湊を苦しめる（予定）

元々リリカルなのはは知らなかったが九条に見せてもらいそれからハマった。

転生前は色々大変な毎日を過ごしており、その教訓から疑り深い性格になった。

湊のことを嫌っており、突っ掛かることもしばしば。

術

チャージショット：エボニーに魔力を溜めて撃つ。

時間が長いほど威力が高い。

ウェポンチェンジ：持っている武器をパンドラに変える。

魔力消費が激しく長時間使うことはできない。

パンドラの性能は以下のとおり。

パンドラ（デビルメイクライ）

様々な形に変形する武器。

はじめの姿は鞆である。

変形

ボウガン：ボウガンに形を変えて相手を射ぬく。

ジェラシー：ガトリングに変形して相手を撃ち抜く。

ヘイトリッド：バズーカに変形して相手を撃ち砕く。

一発撃った後のスキがでかい。

リヴェンジ：レーザー方に変形してレーザーを発射。

外したらスキがでかい。

アーギュメント：ミサイル発射可能な移動砲台に変形させる。

ミサイルも魔力で造っており魔力消費が激しい。

グリーフ：ブーメランに変形させる。

オーメン：パンドラから光を放ち周囲を攻撃する。

魔力消費が最も激しい。

名前：九条亮次

武器：リベリオン（デビルメイクライ）

魔力ランク：SS

魔力色：朱色

上條、高木とは違い湊のことを慕っている。

リリカルなのははやてが好きで、何とか接触しようと考えている。

転生前は妹なんていなかったがせっかく転生するなら　　っと神

にお願いして妹をいることにしてもらった。

妹である風香のことを最優先で考えているシスコン。

技

ステインガー：高速で近づいて音速の突きを放つ。

ドライブ：剣を振り章撃破を繰り返す。

ウエポンチェンジ：ギルガメスに武器を変える。

ギルガメスについてら以下のとおり。

ギルガメス（デビルメイクライ）

身体中に銀色の装甲を付けた武器。

両手両足で戦う。

一撃一撃が強力だが、魔力消費が激しく長時間使うことはできない。

能力：チャージ

自身の周りにある魔力を掻き集めて自らの攻撃力を上げる。

自身の魔力を使うことも可能。

名前：早乙女スザク

魔力ランク：なし

転生者殺しに消された少年。

武器は無く、自らの能力でさやか能力を組み合わせる戦う。

さやかとは転生前では無縁で、同じ事件（神のミス）に巻き込まれた時が初対面。

転生してイケメン／美少女になった互いの姿に惚れて付き合いはじめた。

能力：方向変換

動く物全ての動きを変えることができる。

能力発動には少量の魔力と演算能力がある。

名前：小早川さやか

魔力ランク：なし

明るい性格で惚れやすい。

暇が嫌いで暇潰しのためなら原作介入もしてしまう。

原作介入しようとしたため転生者殺しに消された。

能力：物理変換

物の形を変える力。

魔力と少量の演算が必要。

名前：沢田光秀

武器：ブラッドナックル

形：グローブ

魔力ランク：S+

魔力色：黄色

フェイトの前に現れた転生者。

自身のことをフェイト達を『救いたいと思う人』と言っていた。

転生前のことは今後明らかになる（予定）

魔力に関しては転生者の中でもダントツで高く、身体能力は銃弾が見えるほど。

ある意味チートスペックである。

能力：相殺

相手の魔力系攻撃に自身の攻撃を当てて相殺する。

相殺する魔力分魔力を使う。

名前：平和島直也

魔力ランク：SSS

魔力色：黒混じりの紫

フリーの何でも屋。

とある依頼者により沢田の命を狙う。

名字の割りには暴力的で邪魔なものは何でも壊そうと考えている。

能力：マスカット銃

自分の好きな場所にマスカット銃を製造する。

使い捨てで一発ごとに取り替えなければならないが、その分威力が高い。

設定

結界：アイギスが張ることがある。

結界内では一部の者しか動くことができない。

転生者の実力を一時的にだが弱めることができる。

結界内で転生者が負った傷は転生者殺しが負わせたように灰になる。

能力：一部の転生者が転生時に貰うことができる力。

様々な種類がある。

転生者紹介：無印（一部設定追加）（後書き）

こんにちはー勦bでーす

湊「こんにちは」

前書きにも書いたように書いてほしい項目があればコメント下さい。

湊「次回……というよりも、次回からは少しの間本編じゃないんだよな」

次回から少しの間は番外編としてコラボをやります！！

湊「やれやれ、無印終了は何時になるのやら」

PS病みつきシリーズ短編投稿しました！

Hの謎ノハーフデバイスを追え（前書き）

今回は『パスワード・マウンテンさん』とのコラボです。

一応ですがAS終了後の話です

なのはは湊が戦えることは知ってます

ハーフデバイスは私ではなくパスワードさんの設定です

Hの謎ノハーフデバイスを追え

森の中、俺となのはちゃんはそれぞれの武器を片手に目の前にいる敵を見る。

「ウオオオオオオオオオオ!!!」

目の前の敵は石の塊で形は人型、いわゆるゴーレムという奴だ。

俺は自身の服装を見る。

なのはちゃんの目の前というのもあるが、制服姿で眼鏡を掛けており左手には日本刀に姿を変えたアイギスを持っている。

(アイギス、転生者は何処だ?)

このゴーレムは転生者が造ったものだ。

おそらくだが、ゴーレムを操作するため転生者も近くにいるはずだ。

(少し離れてるわ)

……面倒だな。

「湊さん!!」

なのはちゃんの言葉を聞き俺は顔を上げる。

目の前にはゴーレムがあり、右手を振り上げていた。

俺はアイギスを前にしてゴーレムの一撃に備える。

なのはちゃんが俺とゴーレムの元に行こうとするが、それよりも先にゴーレムの重い一撃が俺に当たる。

「クッ!!」

ゴーレムの一撃により俺はふきどばされる。

……この辺りでいいか。

適当な場所で着地するとアイギスを見る。

「やるぞ、アイギス」

「わかったわ、湊」

「『同調開始』」

ゆっくりと目を瞑る。

少しして目を開くと俺の姿が真っ白なコートに変わっていた。

(転生者の場所まで指示するわ)

(頼むぞ)

俺はアイギスの指示に従って行動する。

ゴーレムとなのはちゃんがいた場所から少し離れた場所に転生者であるう奴はいた。

上手く木に隠れており探しにくい場所にいる。

「これであいつを殺せば」

「誰を殺すんだ」

ゆっくりと背後から近付きながら言う。

「ッ！！ 誰だお前は！？」

転生者が慌てながら俺を指差して言う。

教えてやるよ転生者

「名前は秘密だ」

お前等には最も縁ある肩書を

「だが、肩書きなら教えてやるよ」

俺はお前等を狩るもの

「『転生者殺し』だ」

そう言うと同時に柄を握り光速で相手の胴体を真っ二つに切る。

何故あいつは灰にならない!?

あのゴーレムは転生者の力により作り出されたものだ。

その転生者が消えたいま、ゴーレムも消えるはずなのに……

(湊!!　なのはちゃんが危ない!!)

茫然としていた俺はアイギスの念話を聞き、なのはちゃんの元に
向かう。

向かおうとする。

だが、俺が一步踏み込んだと同時にゴーレムに赤い魔力弾があた
った。

赤色の魔力!?

俺は魔力弾が放たれた方を見る。

そこには

「危なかったわね、なのは」

「心配したんだよ」

二人の女の子、アリサちゃんとすずかちゃんが杖を片手に立っ
ていた。

「アリサちゃん！？ それにすずかちゃんも！！？」

なのはちゃんが突然彼女達が現れたことに困惑しながら言う。

「行くわよ、すずか」

「うん、わかった」

2人は杖を力強く握り、構える。

2人が持つ杖はなのはちゃんが持つ杖の色違いであるものだ。

アリサちゃんが赤

すずかちゃんが青

まあ、イメージ通りといえばそうだな。

……だが、何故彼女達が魔力を？

俺は遠くから2人の戦いを見る。

アリサちゃんが魔力弾を展開する。

「当たれ！！」

展開した魔力弾を一斉に打つ。

何発かは外れたが、それでも大半は当たった。

ゴーレムが怯むとすずかちゃんが杖を向ける。

「凍れ!!」

その一言で先ほど魔力弾が当たった場所が徐々に氷っていく。

「なのは! 今のうちに!!」

「うん!!」

なのはちゃんはゴーレムに杖を向ける。

「いくよ、レイジングハート!!!!」

その掛け声を聞き、アリサちゃんとすすかちゃんはその場を離れる。

「デイベインバスター!!!!」

桜色の収束魔法がゴーレムを包み込む。

……相変わらず恐ろしいな。

苦笑いを浮かべながら俺はなのはちゃん達に近づく。

「湊お兄ちゃん!!」

なのはちゃんがいち早く気付くと俺の胸に飛び込んできた。

「ごめんね湊お兄ちゃん。

わたしがもつと早く動いてればケガさせずにすんだのに……

あっそうだ!!

湊お兄ちゃん何処かケガしてないの！？
ケガしてるんならわたしが手当てするよ！！」

アリサちゃんやすずかちゃんが居るのにも関わらずなのはちゃんは俺を『お兄ちゃん』と呼ぶ。

それだけ動揺しているんだろう。

そんななのはちゃんの頭を軽く撫でながら優しく言う。

「幸い俺はケガしてないよ。

それよりも、少しいいかな？」

アリサちゃんとやすずかちゃんがゆっくりと此方に来る。

「その杖はなんだい？」

俺の問い掛けにアリサちゃんが応える。

「ハーフデバイス……ってやつらしいです」

……らしいってなんだ。

「露店商の人に宝石を貰ったら、突然杖が変わって……
すずかと話してたら、これってなのは達が使ってるのと同じのじやないかってことになって」

「そのまま使っていると」

俺が口を挟むと2人は頷く。

(湊、家に帰るわよ)

アイギスからの急な念話が入る。

その声は何処か真剣みを感じる。

(わかった)

「それじゃ、俺はアイギスさんと少し用事があるから帰るよ」

なのはちゃん達に軽く手を振りながら俺は帰路に着いた。

ハーフデバイス？

いったい何なんだ。

……嫌な予感しかしないな。

「ハーフデバイスについての話よ」

家に着き、アイギスは人型に戻ると椅子に座って言う。

俺はアイギスの前の席に座り、口を開く。

「あれはなんだ」

今までハーフデバイスなんて言葉は聞いたことないぞ。

「この物語にはない技術よ」

……違う物語の技術か。

「まあ、まるつきりないってわけでも無いんだけどね」

「……何が言いたい」

まるつきりないってなんだ。

「あの技術は『類似した物語』の技術よ」

類似した？

「物語なんて沢山あるんだから類似した物語があっても可笑しく
ないわよ」

なんだそのメタ発言。

「向こうの物語は『ハーフデバイス』があつてこの物語には無い。
それだけでも違う物語になるのよ」

「ならなんで、違う物語の技術があるんだ」

転生者の仕業か？

「これは湊には直接的には関係ないんだけど……」

アイギスは少し黙ると口を開く。

「漂流者よ」

「漂流者？」

転生者と何か違うんだろうか。

「漂流者は転生者と違って物語を大きく変えることが無いの。基本的にはね」

だが、今回は違う。

「ハーフデバイスという技術が流れてしまった以上放っておくことは出来ないな」

ハーフデバイス

魔力が無いアリサちゃんやすずかちゃんでも使えるデバイスか。

充分物語を変えられる可能性がある。

「湊は漂流者は転生者と違って消せないわよ」

何故だ？

「漂流者は転生者と違って漂流者前の物語に関わりがあるの。だから、無闇に消せないわ。時と場合によるけどね」

「どついつ場合なら消せるんだ？」

漂流者だろうと消したほうが早い。

「うーん。物語を大きく変えられそうになったら消してもいいけど。」

今回は相手を元の物語に戻したら転生者同様元通りになるし、消すのは駄目ね」

それだけ言うとアイギスが立ち上がる。

「漂流者は漂流してきた時から場所を把握してるから今すぐ会えるけどどうする？」

俺はアイギスに会わせて立ち上がる。

「決まっているだろ」

アイギスの右手を掴むと姿が変わり、白い指輪になる。

「漂流者とやらに会いにくいっか」

悪いけどイレギュラーには退場してもらっ。

漂流者……！

悪いけどイレギュラーには退場してもらっ。

漂流者！！

町外れにある古びた工場内に入ると真ん中には白衣を着た工場には不釣り合いな男がいた。

「綺麗な宝石が貰える露店商に会いにきたんだが……おまえか？」

俺が言つと男が此方を向き軽く頭を下げる。

「現在は在庫を切らしてしましまして……これしか残ってないんですよ」

そついう男の手には青と紫の宝石があった。

「その宝石には消えてもらつ。勿論お前にもな」

「おやおや、怖いですね」

俺は指輪を男に向けると男も2つの宝石を俺に向け。

「……ハーフデバイスは2つ使えるのか？」

「察しがいいですね。
魔力あるものが使えばハーフデバイスは2つ使うことができますよ。」

と言いましても、この試作品だけですけどね」

それだけ言うと男は静かに言う。

（アイギス、同調は出来ないんだよね？）

（ええ、ただ、今回は状況が状況だからピンチになったら許可するわ）

アイギスとの念話を終わると指輪から日本刀に姿を変える。

「セットアップ」

男が言うと一瞬青紫色の光に包まれる。

光が収まるとそこには変わらず白衣を着た男がいた。

変わったとしたら

……不釣り合いな武器だな。

男の左手には青色の斧があり、靴がローラースケートに変わっている。

白衣に斧……？

持ってるだけで精一杯って感じじゃないのか？

「油断ですね」

「なっ!?!」

背後から声が聞こえたと思ったら既に男は俺の後ろにいて斧を振りかざしていた。

斧による一撃をアイギスで防ぐが、予想以上に重い一撃のため難なく振り飛ばされた。

吹き飛ばされると壁に勢い良くぶつかる。

(アイギス、こいつ……!!)

(見かけ以上の力ね)

男はゆっくりと此方を向くと楽しそうに言う。

「この斧はレックスと言う名前ですね。」

魔力を込めればそれを力に変換してくれるんです。

ローリースケートはD アームズで、此方も魔力を込めれば込めるほど速度を増すすぐれモノです。

どちらか私がここにきて作った最高傑作ですよ」

……聞いてないことをペラペラと。

男は少し黙ると此方を見てため息を吐く。

「まさか、私の最高傑作最初の相手があなたのような子供になるとわ。」

これでは直ぐに終わりそうですね」

落胆したように男が言う。

(……湊)

男が言い終わると同時にアイギスが念話で話し掛けてくる。

(同調するわよ)

(……いいのかよ)

いきなり何を言いだすかと思えば……

(このままじゃ勝ち目は無いんだからいいわよ。

湊に死なれたら私は困るんだから)

……まあ、死ぬのは御免だな。

俺はゆっくりと男を見る。

「それでは、あなたには退場してもらいましょう」

それだけ言うと男は光速で間合いを詰めてくる。

「『同調開始』!!」

俺は姿を転生者殺しに変えると右手で柄を掴む。

それとほぼ同時に男は斧を振り上げる。

「姿を変えたところで変わりません、終わりですよ」

「終わるのはお前だ」

俺はアイギスを抜き光速で相手の左手を切るうとする。

が、男はそれを察したのか一気に間合いを取ってきた。

「なんだ、逃げるのか」

「なるほど、抜刀術ですか」

冷静に分析している男を前に俺は刀を鞘にしまう。

「面白いデータがとれそうだ」

「とる前に消すから安心しろ」

男が斧を構えるのにあわせて俺も構える。

……抜刀術じゃ斧相手には分が悪いか？

まあ、このまま頑張ってみるか。

男が光速で間合いを詰めてくる。

それにあわせて俺は軽く後ろに飛ぶ。

「甘いですよ」

男はそんなことにかまわず突っ込んでくる。

掛かった!!

男が先ほど俺がいた場所に立つと同時に右手を引く。

すると、男の動きが止まる。

「なっ……!？」

「甘いのはお前だったな」

俺は動きを止めた俺に近づき鞘で顔を横殴りする。

男はその衝撃で軽く飛ぶが直ぐに着地する。

「動きを止める魔法……?」

いや、あの感覚からしてなにかに巻き締められたんでしょうか」

「知るか!!」

正解は魔力線で身体の至るところを巻き締めて動きを止めたんだよ。

俺は後ろに七本の幻魔刀を造る。

「射殺せ幻魔刀!!」

俺が言うと同時に幻魔刀が男を狙って動き出す。

「魔力で武器を造とは……
初めのころよりかはやるようになったみたいですね」

男はローラーズケートによる高速移動で横に回避する。

幻魔刀は曲がることなく前の壁に刺さった。

……あのローラーズケートは邪魔だな。

「それでは、そろそろ此方も行きましようか」

男はそう言うと同時に間合いを詰めて斧を振り上げる。

斧による一撃を鞘で防ぎ、抜刀術で男の胴体を軽く切ろうとするが、それはまた高速移動によりバックステップだ躲された。

今度は俺から間合いを詰めてみる。

間合いを詰め、抜刀術で相手を狙うが、それを避け俺の後ろに立ち斧を振り上げながら言う。

「これで終わりですね」

……どうかな。

男と俺の間に魔力線を何重にも重ねた小さめの壁を作り、それで斧による一撃を防ぐ。

「これは……!!」

「お前の勝ちが消えた」

俺は男が逃げるよりも早く鞘で腹を横殴りする。

すると、先ほどのように勢い良く飛ぶ。

が

それは途中で止まる。

七本の幻魔刀の付近で男は動きを止めた。

「これは、さっきのと同じ!!」

「ああ、ワイヤーでお前の動きを止めさせてもらったよ」

七本の幻魔刀にはそれぞれ魔力線を仕込ませて投げたため、幻魔刀の周りには魔力線が複雑に絡み合っている。

その真ん中に男が入ったと同時に大量の魔力線で巻き締めたのだ。

「……意味がわかりませんね」

「何がだ？」

呟くように言った男に聞く。

「先ほどからあなたは私を殺そうとしなかった」

……殺したら問題になるからな。

「何故でしょうか？」

「俺はある奴ら以外は殺さないし殺す気はない」

それだけ言うと同調を解除してアイギスを軽く投げる。

アイギスは着地する少し前に人型になると男を見る。

「あなた、漂流者ね」

アイギスは静かに男を睨みながら言う。

「ええ、漂流者ですよ」

対して男は笑みを浮かべながら応える。

「元の物語に帰ってもらおうわ」

「それはそれは、嬉しい話です」

それだけ言うと男はデバイスをしまつ。

「疑わないのか、俺達のことを」

いくら何でも従順すぎる。

「行くあても無いですね。」

それに、このワイヤーがある以上私には自由がありませんね」

……そうかよ

俺達の会話を聞きながら満足気に頷くアイギス。

アイギスが指を鳴らすと次元の切れ目が現れる。

「湊、魔力線を解いてあげて」

「わかった」

俺はアイギスの指示通り魔力線と幻魔刀を消す。

「あなたがこの切れ目を進んでいけば物語に戻るわ」

「わかりました」

男が言うとは故か切れ目ではなく俺に近付いてきた。

「これは今回のお詫びです。

受け取ってください」

そういつて紫色の宝石を俺に手渡しする。

「これは先ほど私が使っていたローラースケートのハーフデバイスです。

性能は保証します」

……俺は魔力がないし、ありがたく受け取っとくか。

「貰っておこう」

有難いモノを貰った。

これがあればいざというときにアイギス無しでも時間稼ぎはできる。

「それでは、また会えることを楽しみにしています」

「今度は俺から会いに行くかもな」

転生者殺しのついでに顔ぐらいは出してやるぞ。

「それはそれは……」

その日を楽しみにしときますね」

笑いながら切れ目を進もうとする男を呼び止める。

「待て」

「……？　どうかしましたか？」

「名前」

「名前……？　ああ、そういえばまだ名乗っていませんでしたね。ドクトル・ファーマーとでも呼んでください」

……ドクトル・ファーマーか。

「俺は湊、鳴海湊だ」

俺が言つと今度こそドクトル・ファーマーは切れ目を進んでいった。

徐々に灰になっていく宝石をアイギスに渡す。

「これを使うのは湊の勝手だけど、余り多様しないでね」

「わかってる」

それだけ言つて俺は工場から出る。

「……帰るか」

空を見ながら俺は言つ。

「今日は私は頑張ったんだから、ハンバーグを作りなさい」

「この間作つただろ」

「うー だったらクリームシチュー!!」

「また手間が掛かるものを……」

「作ってくれないの?」

「……今日はお前も働いたんだし作ってやるよ」

「……本当に？」

「疑うなら作らないぞ」

「疑ってないわよ!! 湊、私は疑ってないわよ!!」

「二回も言うな」

ありふれた会話

そんなありふれた会話をしながら俺とアイギスは帰路に着いた。

ありふれた幸せを体感しながら

「そういえば湊さん」

ハーフデバイス事件が終わった翌日、なのはちゃんと一緒に帰っていたらこんなことを言いだした。

「今日ね、アリサちゃんとすずかちゃんがデバイスを使って魔法を使う夢を見たんだって」

……アイギス修正しきれてないぞ。

「2人とも同じ夢見るなんて不思議だね」

「それだけ仲がいいんだろ」

……ドクトル・ファーザーか

「わたしは何時も湊さんと一緒にいる夢を見るよ」

「……そっか」

あいつとはまた会う気がする。

……何か、また来そうな気がする。

「俺もなのはちゃんと一緒にいる夢を見るときがあるよ」

漂流者は勘弁願いたいな。

……転生者はもっと勘弁だけど。

俺はなのはちゃんを見る。

顔を赤くしながらはにかむ彼女を見る。

転生者だろうと漂流者だろうと

彼女の物語は変えさせない。

絶対にだ

Hの謎／ハーフデバイスを追え（後書き）

こんにちはー勦bでーす

ハーフデバイスは強いですねー

原作通りに話を進めるこの作品からすれば最悪なアイテムですね。

次回もコラボになります！！

PSパワードさんからハーフデバイスを本編に出す許可を貰ったけど、この作品には合わないな。

今回のコラボを書きながらそう思いました

始まりは再会と共に（前書き）

コラボばかりしてたら本編が進まないため少しだけ本編を進めます。

べ、別にコラボに文句を言われたをじゃないんだからね／／／／

始まりは再会と共に

転生者の1人、沢田はビルの屋上にて黙々とスクワットをやっていた。

「沢田、もうすぐ時間です」

そんな沢田の近くに切れ目が出来ると1人の女性がゆっくり歩きながら言う。

「わかってる、あと1セットだけやらしてくれブレイズ」

ブレイズと呼ばれた彼女はため息を吐くとフェンスにもたれながら沢田を見る。

「今日はあいつら来るかな？」

「あいつらとは、転生者殺しのことでしょうか？」

「転生者殺しとやらもだけど、平和島もだ」

「平和島はわかりませんが、転生者殺しは来るはずですよ」

ブレイズはまるで転生者殺しが来ることを知っているかのような口振りだ。

沢田はそれを聞き、口元に笑みを浮かべる。

「この前の借りを早速返すか」

沢田はこの間の戦闘を思い出しながら言う。

「沢田では勝てませんよ」

ブレイズはまた確信があるような口振りだ。

「転生者殺しに勝ちたいのなら、原作キャラと手を組むか、チート能力を手にするかのどちらかになります。今の沢田にはとても無理な話です」

「チート能力は無いけど、原作キャラと手を組むなら可能じゃないか」

「テストロッサには君悪がられていたと思いましたが」

「えっ!?!? そうなの!?!?」

ブレイズは再度ため息を吐く。

……何故この男はこんなことにすら気付かないのでしょうか。

いきなり見ず知らずの男から自分の名前を言われるんだ、気味悪いに決まっている。

沢田はスクワットを終えると頭を軽く抱える。

「うーん、こういう場合はどうすれば好感度が上がるんだ?」

「知りません。それと、好感度とか言わないでください。気

持ち悪いです」

「酷っ!?!」

ブレイズは沢田を軽蔑するかのように見ている。

そんな視線を気にせず沢田は上を向く。

「まあ、はじめはこんなものだろ。 フラグさえ立てれば後は楽だ」

沢田は更にキツくなるブレイズの視線を無視して自らの左手を空にかざす。

「フェイトちゃんさえ助ければいい。 転生者殺しやなのはちやんなんかよりも優先するのはフェイトちゃんだ。 例えなのはちやんと敵対する形になっても、フェイトちゃんさえ幸せになればそれでいい」

独り言のように呟く沢田を冷たい視線で見るブレイズ。

……何故私がこんな気色悪い男と組まなければならぬのだ

ブレイズは自身の主を恨みながら沢田に言う。

「時間だ。 物語が始まるぞ」

ブレイズの声聞き沢田はフェンスに向かって走りだす。

3メートルはあるであろうフェンスを悠々と飛び越えると落下し

ながらブレイズに言う。

「行って来る！ ブレイズ！！」

そう言つとブレイズの視界から姿を消す沢田。

「行ってらっしゃい、沢田。 我が主を大いに楽しませて下さい」

そう言つと自身が出てきた切れ目に向かって歩きだした。

そんな沢田とブレイズの会話から少し前のこと、湊となのはは2人並んで仲良く歩いていた。

「すずかちゃんの家に行くのははじめてだな」

湊は呟くように言う。

「湊お兄ちゃんは猫が好きだからきつと気に入ると思うよ！」

それを聞き湊は薄らとだが口元に笑みを浮かべる。

湊は姉の次に猫が好きだ。

転生者殺しになる前は家の都合で猫が飼えなかったものの、なつてからは猫を飼うことが多くなった。

この物語では飼ってないが、何時かは飼う予定らしい。

（猫が沢山入るからって油断しちゃダメよ）

湊はその声を聞き、冷静に返す。

（油断するはずがないだろ。今回はちゃんの目的だって把握している）

（なのはちゃんの近くにいたら物語を変えられるのを防ぎやすい。

現に、今から行く場所で物語が進むわ）

（お前は何時でも戦えるよう、準備をしておけ）

湊は自身のネックレスを見る。

今のアイギスはネックレスに姿を変えているのだ。

「わたしも猫好きだよ湊お兄ちゃん！」

「そう、俺と同じだね」

なのははこんなどうでもいいことでも湊と同じと言われ嬉しそうな笑みを浮かべる。

湊はそんななのはの横顔を見ながら欠伸をする。

「眠そうだね」

「最近寝るのが遅くてね」

転生者がいつ行動しても対応できるように湊は睡眠時間を削っている。

夜遅くまで起き、朝は早く起きる。

といつても、小学生の体である湊から見た時間感覚であり、夜遅くと言つてもたかがしれている。

「わたしでよかつたら何でも協力するよ！

湊お兄ちゃんのためならわたしは何だってするもん！

湊お兄ちゃん、困ってるんならわたしに何でも言つてね！

他の人に頼らずわたしに言つんだよ。

わたしは他の人とは違って湊お兄ちゃんに最後まで付き合うからね。

湊お兄ちゃんがいやって言つても、付き合うからね。

でも、湊お兄ちゃんがそんなこと言うはずが無いよね。

湊お兄ちゃんがわたしのことを嫌うはずがない。

わたしは湊お兄ちゃんを嫌わないよ。

何があつてもね」

そう笑顔で言うなのはの手を湊は軽く握る。

「大丈夫。俺はなのはちゃんを嫌わない。何があつてもね」

下手なことを言うより無難なセリフだろう。

なのははそれを聞くと顔を赤くする。
それに対して湊は普段どおりの笑みでなのはを見る。

この物語が終われば、なのはちゃんは俺を忘れる

だから

それまでに

忘れるけど

幸せな思いをしてほしいな。

湊は幸せそうな笑みを浮かべるなのはの横顔を見ながらそんなことを考える。

転生者殺しの転生者

矛盾した肩書きを持つ者として

物語に関わるイレギュラーとして

『決まった終わりが用意されている転生者として』

始まりは再会と共に（後書き）

こんにちはー勦bでーす

相変わらず必要のない話をグダグダと書きました。

次話は戦闘になるかも??

PS今回から投稿ペースが変わり、2週間更新になります

理由としましては、私が書いている連載である『忘却のJ』の凍結を解除したからです

転生者殺し 忘却のJ 転生者殺し

と更新します

ですが、書きたいと思ったり忘却のJのネタが思いつかなかつたりしたら此方を更新します

猫好きは再開と共に（前書き）

ぼのぼのを目指した結果がこれかよ!!

猫好きは再開と共に

湊となのはがすずか邸に遊びに行く日の数日前。

2人の転生者、高木と九条は同じ夢を見ていた。

何処かの教室に寝巻姿のまま席に座っている彼等の前には、1人の黒髪の女性が教卓に座っていた。

「これで君達的能力は少しは強くなったよ」

女性が言うと、2人は互いのデバイスを見る。

「この力を使って転生者殺しを消してくれよ」

軽い笑みを浮かべながら言う女性が高木は睨む。

「転生者殺しを消したら、本当に」

「くだい男は嫌われるぜ。上條は僕が責任を持って生き返らせるよ」

女性はやれやれと言った感じで応える。

女性の言葉を聞くと高木は立ち上がり、それに合わせて九条も立つ。

「転生者殺しは俺達が消す」

高木がそう言うと、光に包まれる。

「上條の敵は俺たちが討つー!!」

九条も高木同様光に包まれる。

「そう、神である僕のご加護を君達に」

女性は自らを神と名乗ると2人の転生者を見る。

自ら選んだ転生者達

自身の邪魔な存在になりゆる転生者殺しを消すための刺客である
彼等を

2人を包む光が急に強くなる。

数秒後、光が収まると転生者の姿が消えていた。

「さあ、僕の刺客達を消せるかな」

女性は目の前に現れたモニターを見る。

「転生者殺し君」

モニターはベッドでぐっすりと眠る湊の姿があった。

「まあ、僕は君達のために最高の舞台と最高の観客を用意しとく
よ」

彼女は教卓に降りると、自身の前に現れた切れ目に向かってゆっくりと歩きだした。

優しい笑みを浮かべながら

湊となのはがずか邸につくと、2人はずかの部屋へと案内された。

「えーと……」

「……湊さん？」

「なんだい？」

湊は首を傾げながら自身を見ている2人に優しく微笑みかける。

猫を被っている時の湊でも滅多にしないことだ。

そんな湊にアリサとずかは苦笑いを浮かべ、なのはは顔を赤くしながら湊を黙って凝視していた。

「……湊さんって猫好き……ですよね」

「よくわかったね」

「……そりゃまあ、そんな湊さんを見たら誰だっかわかりますよ」
すずかの発言に軽く驚いた湊を見ながらアリサは苦笑いのまま彼を見る。

湊は4匹の猫を同時に抱き抱えており、その表情は何時もよりも何処か柔らかい。

「湊さんは昔から猫好きなんだよね」

なのはは湊の横に座り、彼を更に凝視しながら言う。

そんななのはを見て更に苦笑いを強くした2人は猫ではなく、あの動物を撫でていた。

「なのはも湊さんばかり見てないで自分のペットを撫でなさいよ。ねーユーノ」

「きゅっきゅっきゅっきゅー」

「そんな動物撫でるよりも湊さん見てたほうがずっとましだよ」

「きゅー!?!」

「なのはちゃんの湊さん愛は相変わらずだね……」

落ち込んでいるユーノを優しく撫でながらすずかはなのはを見る。

なのはが湊のことを好きなのは学年でも有名だ。」「……きゅー」

「なんだかユーノの元気がないわね？」

力なく鳴くユーノを撫でながらアリサは首を傾げる。

「なのはちゃんがポケットの中に詰め込んでたからかな？」

「何やってるのよなのは!？」

湊は自身な抱えていた猫を一匹なのはに私ながら自身の憶測を言う。

明らかに小動物にやるべき行動ではないのはの行動にアリサが驚くが、当の本人は湊から渡された猫の相手と湊を見るのに夢中になっていた。

「……何でそんなことをしたのよ」

「だって、ユーノ君がいたらわたしと湊さんの2人つきりになれないもん」

「動物のユーノぐらい間に入れてあげなさいよ!!」

「動物だろうと、わたしと湊さんとの仲に入ろうとする奴は許さないよ」

「だからってポケットの中に詰め込む必要ないじゃない!」

「それがね、あるんだよアリサちゃん」

「なっ……どんな理由よ」

「ユーノ君をポケットの中に詰め込んだかないと湊さんがわたしじゃなくてユーノ君を見るかもしれないじゃん」

「動物にどれだけ嫉妬してるのよ!!!」

アリサは言うてはみるが、今の湊は明らかに学校にいるとき以上に幸せそうだ。

こんな幸せそうな湊を見れた切っ掛けが猫なのだ、嫉妬する気持ちもわからないでもない。

「きゅー!」

アリサがため息を吐くとユーノが立ち上がり、すずかの部屋を駆け足で出ていった。

「ユーノ(君)!」

アリサとすずかが追い掛けるために立ち上がるつもりだが、それをなのはが止めた。

「ユーノ君はわたしが探してくるから、皆はここにいてね」

そう言うて駆け足で部屋を出ていったなのは。

(湊! なのはちゃんに付いて行って!)

(わかってる!!)

アイギスに念話で応えようと自身も立ち上がる。

「なのはちゃん1人じゃ心配だから、俺もユーノ君を探してくるよ」

そう言って部屋を出る湊。

部屋を出て直ぐになのはが曲がり角を曲がったのを確認した。

(アイギス、転生者の反応は?)

(沢田の魔力は無し。高木、九条は此方に向かって来てるわ。

このままなら九条のほうが先に来るわね。平和島はここからまだ距離がある場所において、反応は無し。介入してこないかもしれないわね)

(平和島の目的は沢田だ。原作介入は目的外だろうからな。

警戒するのは沢田の方だ。魔力無しということは、来るかどうかはまだわからないか……)

湊はゆっくりと歩きだす。

その顔は先程とは違い無表情に

自身の役割を果たすために

ゆっくりと歩きだした。

猫好きは再開と共に（後書き）

こんにちはーおどりでーす

さて、すずか邸での争いが終わった次の話は何だっけ？

温泉だっけ？

街中での触手だっけ？

……忘れちゃった

PS少しの間更新出来ないため、次回更新は時間がかかります

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4868w/>

魔法少女リリカルなのは～転生者殺しの転生者～

2011年12月5日23時55分発行